

第54回 日本アメリカ文学学会全国大会

京都大学 2015年10月10日(土), 11日(日)

研究発表・ワークショップ・シンポジウム要旨

第1室(吉田南総合館北棟2階, 共北25)

司会 丹羽隆昭

1. 荒野とバラ——Francis Parkman の「森の歴史」における園芸学の 作用

高知県立大学 山口善成

Francis Parkman (1823-1893) はその生涯をアメリカ植民地史の執筆に捧げたことで知られる。それはニューイングランド、ニューフランス、および先住民インディアンが三つ巴の領土争いを繰り広げていた頃の物語で、主たる舞台はアメリカの広大な荒野だった。ゆえに Parkman は自らの歴史を「アメリカの森の歴史 (the history of American forest)」と称し、実際、彼の歴史は植民初期の森林踏査や各勢力同士の境界での戦闘がその大半を占める。しかし、このような未開の荒野に対する関心の一方、Parkman は飼いならされた自然、すなわち園芸学にも没頭している。1866年にはバラの栽培技術や分類について解説した *The Book of Roses* を著し、その後5年あまりの間に26編もの記事を *The American Journal of Horticulture and Florist's Companion* 誌上に発表している。園芸における彼の業績は、横浜から輸入されたユリの株を交配した *Lilium parkmanni* の開発や現在 Parkman crab として知られる八重咲きのりんごの栽培に代表される。Massachusetts Horticultural Society での要職を歴任し、さらに1871年春にはハーバードの園芸学教授を務めていることを勘案すれば、彼の園芸分野での活躍は単なる紳士のたしなみのレベルを超え、広く社会に認められるものであったと言えるだろう。そして興味深いのは、これらの活躍がちょうど彼の植民地史執筆の最盛期と一致していたことである。本発表の目的は、荒野や森に重点を置いた Parkman の歴史記述にとって、造園や交雑種開発の実践がいかなる意義を持っていたのかを再考することである。

一見したところ、荒野と庭園への関心は相反するように見える。Parkman がその歴史書の中で繰り返し

強調したのは、「アメリカの森の歴史」を書くためには「書斎の中で行うのとは違った種類の調査が不可欠」だということだった (*The Conspiracy of Pontiac*)。ゆえに彼は重要な出来事が起こった「あらゆる場所を実際に訪れ、書こうとしている対象の例証となるような土地や人々を注意深く観察した」という (*Montcalm and Wolfe*)。有名なオレゴン・トレイルの旅も先住民インディアンの生活を二次的な資料によるのではなく、直接体験に基づいて書くために行われた。ところが園芸分野において、Parkman は実践重視の主張を180度翻すことになる。Massachusetts Horticultural Society の報告書の中で、彼はこう書いている。「書物の助けを見くだすことは実践的なスキルや優れた勤の証拠にはならない。このことはとりわけ園芸にあてはまる。この分野において秀でた実践的能力を有する人は例外なく、過去の先人や同時代の業績について記録した書物に通じている。園芸学は広範な科学原理に基づく学術であり、それら原理を無視する栽培者の間では、これまで顕著な成功例は見られなかった。」もちろん、書物による知識も実地体験も両方大切だという主張として理解することは可能である。しかし、歴史記述と園芸学とで、Parkman が力点を置き換えていることは見過ごすことができない。なぜこのような違いが生じたのかを問うことで、そもそも彼が歴史と園芸の両分野をそれぞれどのような営為として理解し、どのような関係にあるものとして折り合いをつけていたのか考えてみたい。

2. アメリカン・ルネッサンスにおける 先住民自伝——William Apess の *A Son of the Forest*

立正大学 小澤 奈美恵

本発表では、先住民作家 William Apess (1798-1839) の自伝 *A Son of the Forest* (1829) をアメリカン・ルネッサンス文学の中に位置づける重要性を考察する。1990年に A. LaVonne Brown Ruoff と Jerry W. Ward, Jr. が編纂した *Redefining American Literary History* によって、それまで切り捨てられてきたマイノリティ文学を含めたアメリカ文学史の見直しが図られ、

Ruoffによって三つの先住民自伝が紹介された。その一つが Pequot 族の作家 William Apess (1798-1839) の自伝 *A Son of the Forest* であった。その後、1994年に Arnold Krupat が編集した *Native American Autobiography* が出版され、以来、Apess を含む先住民自伝文学の研究書は多く世に出されてきた。

先住民の自伝は、それぞれの時代で先住民がいかん白人支配下に置かれていたかを明確に物語っているが、個別の文学形態として扱われ、アメリカン・ルネッサンス文学との関係性の中では十分捉えられてこなかったのではないだろうか。共和国アメリカの誕生とそれにふさわしい国民文学の要請との葛藤の中で、白人主流作家は作品を編み出していったが、先住民自伝も白人の言葉と文学様式を借りることで、白人が支配する出版文化の中でその声を主張しようとしていた。Apess の自伝には、conversion narrative, slave narrative, captivity narrative などの要素が混成し、支配階層の白人文学の様式という制約の中で先住民の声を主張し、国民文学の一部を形成しようとしていたのだ。

Apess の自伝は、ほぼ同時代の先住民作家、Black Hawk (1767-1838)、George Copway (1818-69)、Sarah Winnemucca (1844-91) と比べても、自らの部族である Pequot 族の伝統から切り離され、その文化や伝承を語るができないう点で、最も深刻に白人の征服と支配の傷を受けている。にもかかわらず、白人によって翻訳・編集された Black Hawk の自伝が、消えゆく運命と強制移住法を容認しているのと同様に、消えることのない先住民の存在感を主張することに成功している。そして、年季奉公に出された Apess は、Herman Melville が *Moby-Dick; or, The Whale* (1851) の中で描いた Tashtego や Henry David Thoreau が *The Maine Woods* (1854) の中で交流した Abenaki 族のガイドたちと同じ社会的境遇の中で同時代を生きていた。そのような主流文学との関係性の中で、先住民作家 Apess の自伝をアメリカン・ルネッサンスの中に位置づけることは、重要と思われる。

司会 千石英世

3. 皮脚絆物語再び/皮脚絆物語を越えて——*The Pathfinder* が拓いた道

同志社大学 林 以知郎

James Fenimore Cooper の皮脚絆物語連作の中でも、*The Pathfinder* (『道を拓く者』, 1840) は、Nina Baym の言葉を引くならば「もっとも論じられることのない」作品となっている。Cooper 自身にとっては気に入りのロマンスでもあり、例えば Balzac のように Cooper の手になるうちでも「上々の出来合い」と評する向きもあるものの、*The Pathfinder* に現代批評からの食指をそそるものが欠けていることは否定しえない。*The Pioneers* に描き込まれた建国期アメリカ辺境の厚い記述もなければ、*The Last of the Mohicans* が覗き込んだ暴力と性欲望が穿つ深みもない。*The Prairie* を彩った神話的崇高と滅びゆく者のパセティックな叙情もなければ、*The Deerslayer* が切り取った無垢の反転に直面する青春の慄きもまた、ない。ロマンスに満ちているのは、Balzac の言う、“a marvelous succession of tableaux”, 副題にうたわれた *The Inland Sea* 「内海」としてのオンタリオ湖と周辺の森と川の絵画的風景である。Lawrence から H. Daniel Peck に至る神話批評にならって、イデオロギー的葛藤や政治社会文脈との接続から隔絶された、神話的原型のみが織りなす「それ自体として佇立する世界」(A World By Itself) への回帰を13年を隔てた Natty Bumppo の再登場に見とるべきなのだろうか。それとも、Balzac が愛でた「絵画的描写」がなぜかある種の既視感覚を抱かせる、という直観的印象に軸足を置いて、先行する連作群、とりわけ同時期のカナダ国境地帯を舞台とした *The Last of the Mohicans* の焼き直しを見とることのほうが正直な読みなのであろうか。

執筆の経緯をたどる道案内となるべき Wayne Franklin の決定版伝記の第一巻も、残念ながら1840年代を描くに至っていないが、13年を隔てた Natty の再登場という設えに Cooper 自身が気おくれを抱き続けたのは事実であろう。ロマンス執筆の構想が煮詰まった段階に至ってイギリスの出版業者に宛てた書簡の中でも、新たな企ては「航海と湖とネイティブ・アメリカンをめぐるロマンス」(a nautico-lake-savageromance) となろう、とほのめかすに留められている。Edmund Wilson を引くまでもなく、新しいアメリカ作家世代が方法への自己意識を同世代感覚として「発

見」し始めていた1840年代にあって、帰米後の創作意欲を過度の社会批判へと傾注することで孤立し始めていた Cooper に文学的失敗の予感が老いの感覚とあいまって忍び寄っていたとしたならば、娘に懸想したものはや若くはない道案内人が若い船乗りには敗北していく、という筋立てでロマンスを読む作業にはこちらが気おくれを感じてしまう。1840年の Cooper にこの作家なりの「方法的新しさ」を見出す可能性はありえないのだろうか。拓かれた道が過去への回帰ではなく前へ、方法の模索へ、という前進でありうるならば、その可能性を探る手がかりは、上記書簡で吐露されている、「心に定めたのは副題のみ」という一節にありそうだ。The Inland Sea が喚起する撞着のイメージを展開軸とすることで、皮脚絆連作への回帰が連作の物語世界を越えて道を拓いていく、そのような二方向的な想像力のあり方を探ってみたい。

4. セッションなし

第2室（吉田南総合館北棟2階、共北26）

1. セッションなし

司会 宮 川 雅

2. Poe の作品における Shakespeare 的想像力——“Hop-Frog” と *King Lear*

京都大学（院）森 本 光

わずかに二歳半のときに別れてしまったものの、両親が舞台俳優という家庭に生まれた Edgar Allan Poe は、演劇に対する強い関心を生涯にわたって持ち続け、劇評、演劇論、戯曲などを書いた。Poe の演劇に対する興味は小説作品にも表れており、“The Mask of the Red Death” や “William Wilson” などの作品を中心に演劇的構図が指摘されている。このように演劇は Poe の生涯および作品に深く関わっていると言えるが、19世紀の演劇文化との関わりからの Poe の研究は少ない。19世紀のアメリカ演劇で最も人気を集めたのは劇作家 William Shakespeare であり、当時広く大衆に浸透していた Shakespeare の作品は、Poe にも大き

な影響を与えた。Poe の作品には Shakespeare からの引用が多数見られることは、すでに指摘されている通りだが、それにもかかわらず、Shakespeare を通じた Poe の作品の解釈は、これまであまり試みられていない。

また Poe が、19世紀初頭にイギリスやドイツで盛んだったロマン主義の演劇論や Shakespeare 批評に通じていたことも、これまであまり注目されなかった。Poe が生きた19世紀前半は、西欧の文学史の文脈で言えば、従来の古典主義に代わってロマン主義の理念が形成された時代だった。この時期に再評価され、ロマン主義の運動に大きな影響を及ぼすことになったのが Shakespeare である。それ以前にも偉大な劇作家と見なされていたが、三一一致の法則などの演劇構成上の制約を重視した古典主義の美学においては、Shakespeare の作品は統一性がなく技巧に欠けると評価されがちだった。一方でロマン主義は、そうした演劇の規範からの逸脱を偉大な文学的創造力の証として称賛し、欠点をむしろ美点とみなしたのだ。Samuel Taylor Coleridge や William Hazlitt, A. W. Schlegel といった当時の批評家たちは、Shakespeare を時代を越えた天才として持ち上げ、ロマン主義の模範として称揚した。これらの批評家たちと同時代人であり、彼らの著作を実際に読んでいた Poe は、当然、Shakespeare 批評の隆盛と無関係ではなかった。Poe は直接的にも、間接的にも、Shakespeare から大きな影響を受けたと言えるだろう。

以上のような背景を踏まえて、本発表では、まず Poe の Shakespeare に関する言及を取り上げる。そして、ロマン主義の Shakespeare 批評を参照しながら、Poe が Shakespeare をどのように見ていたかを考察する。それを前提に、短編 “Hop-Frog” と悲劇 *King Lear* を比較する。愚かな国王と賢い道化のおとぎ話である “Hop-Frog” は、主人公 Hop Frog と *King Lear* における道化の共通性がすでに指摘されている。しかし、作品のその他の点については、二作品の比較が試みられたことはこれまでなかった。したがって “Hop-Frog” と *King Lear* を、プロットや登場人物の性格、創作の手法などの点に注目して考察し、二つの作品の関係性を明らかにすることを目標としたい。

司会 西谷拓哉

3. 語源的転回——*Moby-Dick; or, The Whale* はなぜ “Etymology” で始まるか

東京理科大学 佐藤憲一

Herman Melville の *Moby-Dick; or, The Whale* (1851) の循環構造については、これまで頻りに論じられてきた。しかし、その際、さほど真剣に考慮されてこなかったのが “Etymology” である。実は、*Moby-Dick* の始まりは、あの有名な “Call me Ishmael” という台詞ではない。あらためて指摘するまでもなく、その第1章 “Loomings” の前には、“Etymology” および “Extracts” と題されたいわば「ふたつの序章」が配置されている。アメリカ合衆国における *Moby-Dick* は、初版出版後150年以上にわたってこの形をとっているのである（イギリス版初版においては、これらふたつの章が最後尾に Appendix として配置されていたため、事情が異なる）。ならば、*Moby-Dick* という小説の循環構造について論じる際には、“Etymology” が明確に意識されなければならないはずである。

それにもかかわらず、国内外を問わず、これまでの *Moby-Dick* 研究は「ふたつの序章」をほぼ等閑視してきた。たとえば、*Moby-Dick* の本編全135章を7通りに分類し、それぞれの特徴を詳細に記述した八木敏雄や、*Moby-Dick* における言語的円環性についていち早く着目し、その特質を克明に論じた高山宏ですら、“Etymology” および “Extracts” について十分な考察を加えているとは言い難い。

こうした状況を鑑み、本研究発表は、ふたつの序章のうち、前に配置されている “Etymology” をとりあげ、その存在意義を明らかにしてゆく。はじめに、“Etymology” が “Hackluyt,” “Webster’s Dictionary,” “Richardson’s Dictionary” という3つの典拠に言及しながら、例えば、当時の英米における英語辞書の一大権威であった Samuel Johnson の英語辞典を黙殺しているのはなぜか、という辞書学・語源学的な問題について、同時代の文脈を踏まえて検討する。

そのうえで本発表は、“Etymology” の物語論的な存在意義について解明したい。具体的には、この、いわば「章ともつかぬ章」は、物語本編とどのような関係性を形成し、また、いささか破天荒に展開するナラティブとの動的な均衡を、いかにして保っているか、という点について考察を加えてゆく。そもそも15世紀に英語に入ってきた “etymology” という語の語源が “a

study of the true sense of a word” (Klein 語源辞典) であることを考慮するならば、“Etymology” が鯨の「真の意味」を提示しようとしているのは明白である。*Moby-Dick* とは、とどのつまりは、鯨の「真の意味」を探求する物語であり、“Etymology” はその結末を予見させる章であるということになろう。そのように読めば、ピーコッド号とその乗組員たちが、大渦巻きに呑み込まれ、消えてゆくという結末は、“Etymology” が whale の語源として “roll” を強調していることと決して無関係ではないことがわかる。“Etymology” は、鯨という語の、ひいては、言葉の「真の意味」の探求は結局のところ失敗に終わるのだ、ということを示しているのであり、そこでは、渦にのまれていくピーコッド号のみならず、循環論理にのみこまれてゆく読者の姿すら想定されていると言っても過言ではない。この意味において、*Moby-Dick* の循環構造は、“Etymology” をこそ物語の始まりと終わりをつなぐインターフェースとしたうえで成立しているのではないだろうか。発表では、この作業仮説の妥当性について逐一検証してゆきたい。

4. *The Scarlet Letter* に見る加虐と被虐の父子関係

桃山学院大学 佐々木英哲

Nathaniel Hawthorne 作 *The Scarlet Letter* (1850) に於いて Dimmesdale 牧師は不義の子 Pearl の父親が誰なのかに事が及ぶと、神経症患者の常同行為よろしく自らの肉に刻まれた姦淫を示す文字 A (dultery) を意識するかのようには決まって片手を胸に添える。ここで Freud による超自我論を援用し、良心の呵責に苦しむ牧師を衝き動かすピューリタン信仰が他者により偽造されたものだとする作業仮説を立ててみる。これが妥当だとすると、同じ屋根の下に住む Chillingworth 医師がその他者だと推察される。本発表では作家のバイオグラフィカルな事情も射程範囲に入れ、牧師を生き殺しにする老医師と病んだ牧師の心的メカニズムを考察し、両者が加虐と被虐に基づく疑似父子の共棲関係を構築するプロセスを議論する。

手順としてまず、牧師の内面の動きを盗み見るために同じ屋根の下に住み、牧師の一挙一動を虎視眈々と窺う似非精神分析医が、17世紀のピューリタンの厳父あるいは神（の代理）として牧師の深奥でさながら悪魔の如く振る舞うさまを検証する。Foucault 的（ポスト）モダニズム的観点からすれば、Chillingworth はパノプティコン（全展望監視システム）を備えた（魂の）牢獄の管理人として振る舞っている。一方、「私の

家はお前 [Hester] がいるところであり、あの男 [牧師] がいるところだ」と嘯く老医師は、作者の生きた19世紀アメリカ社会を席捲したドメスティック・イデオロギーに符号する慈父のイメージも漂わせ、前妻 Hester をダシにして牧師に歪んだ父性愛を注ぎ込み、牧師を幼児化する。脱性化する。こう言ってよければ去勢する。

次に牧師の心的機制を検討する。「私には私自身の自然 (私の精神の法) 以上に神聖なる法は存在しない」 (“Self-Reliance,” 1830) という Emerson による超越主義宣言の先触れは、牧師に感じとれない。幼児化した Dimmesdale は、超越主義の前提となる主体性が他者 A (utere) (Lacan 的な他者 A) なる Chillingworth により奪われているからだ。A (Arthur) Dimmesdale は、愛と嫌悪という相反的 A (mbivalent) 感情をもたらす他者 A に隷属する (Subject : 下/sub に投げ置かれる/object) に過ぎず、牧師の主体性 (Subjectivity) も曖昧 A (ambiguity) の域を出ることはない。

かくして A (Arthur) の魂を植民地化するのが加虐的な他者 A (ただし斜線を引かれた不完全なる偽りの神あるいは父) としての医師であり、他者の欲望 (加虐的父性愛) を被虐的に受容するのが主体 S (正確を期すと主体であって主体ではない斜線を引かれた S) としての牧師であると判明する。Lacan 的な他者 A と主体 S のからくりに通暁するのは、似非精神分析医と俯瞰的な視座をもつ第三の審級としての語り手であり、盲目の Oedipus よりしく状況が見えない牧師には、A と S の力学が紡ぐ A (dultery) の物語が読み解けない。

翻って実父の亡き後、金銭的に一家を支援した叔父つまり代父 Robert Manning の期待を物書きとなることで裏切った Hawthorne は、老医師から家父長権を篡奪し実質的に父殺しの咎を背負う牧師と同じ立ち位置にあったことを意識していたはずだ。そう考えれば Chillingworth が船で命を落としたというまことしやかな噂に、実父を航海で亡くした作家が象徴的な重みを持たせたのも合点がいく。発表者としては、加虐と被虐に基づく歪んだ父子共棲関係に煩悶する牧師と作者がアメリカの Oedipus として作品で浮き彫りになっている、と結論的に提示したい。

第3室 (吉田南総合館北棟2階, 共北27)

司会 江 頭 理 江

1. *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* をツーリズムの観点から読む

同志社大学 (非常勤) 別 所 隆 弘

本発表の目的は、Mark Twain の *A Connecticut Yankee in King Arthur's Court* を題材に、ツーリズムの観点から作品を解釈することである。19世紀後半には、すべての旅程があらかじめ定められているパッケージングの旅行、すなわちツアー／ツーリズムが旅行文化そのものを根底から書き換えたことは周知の事実である。その最初の大きな流行の波に乗って、自らの文名を高めたのが他ならぬ Twain であることもまた Jeffrey Melton らの研究から明らかだ。Twain 作品は、常にツーリズムという同時代の新しい文化潮流の影響と、その影響下において書かれた旅行記諸作品を抜きにしては語れないとさえ言い得るだろう。

本作品を旅行記の観点から読む試みはすでに里内克巳による2005年の論考「旅行記から読む『コネティカット・ヤンキー』」や Amy Kaplan の “The Imperial Routes of Mark Twain” にて詳細に行われている。里内克巳が指摘しているように、本作品は、全体としての旅行記的な構えに加えて、前半の Sandy との諸国遍歴、および後半のアーサー王とのお忍び旅行という、二つの大きな旅が軸になってプロットが構成されており、これらの作中旅行には Twain の旅行記諸作品からの大きな影響を見ることができる。これらの先行研究が示すことは、現在この作品を考察するにおいて、旅／旅行記的な観点を抜きには語れないということである。ではその旅をさらにツーリズムの側面から考えたときに、どのように見え方が変わるのだろうかというのが、本発表の着想である。

本作をツーリズムという観点から読む場合、ホスト／ゲスト間の共謀関係が作り出す象徴／物語の消費の問題が、作品構造を解明する時の一つの重要なキーワードになるだろう。特にそのような関係性は、巡礼ツーリズムの文脈で色濃く見られるものだ。社会学者の岡本亮輔によるならば、宗教的意味が形骸化した巡礼に参加する旅人であるゲストと、ゲストの望む宗教的物語を利用することで利益を得ようとするホストの共謀関係こそが、巡礼ツーリズムを構成する核心的な要

素である。かつて Twain は *The Innocents Abroad* において聖地におけるそうした共謀関係の紡ぎ出す「物語」の嘘を徹底的に暴き出した。ところが本作において、Twain は Hank Morgan にかつて聖地を旅した自分を重ねるような形で偶像破壊的な擬似「巡礼の旅」を遂行させながらも、その旅が形作る文脈は初期の諧謔的かつ啓蒙的な目線とは些か趣が異なるように思える。その違いとは、端的には、ホスト／ゲスト間で共有されている「物語」の価値を、どのように定位するのかという問題に尽きるだろう。

本論考は、このツアーという旅行形式において最も重要なファクターである「ホスト／ゲスト」関係に対する Twain の目線を初期作品との違いの中で浮き上がらせ、その上で、その共謀によって作られる物語が失われた時に、代償として何が支払われるのかを考察したい。

2. 気球操縦士トムの作図法—— *Tom Sawyer Abroad* における 擬似オリエント世界

慶應義塾大学(院) 細野香里

Adventures of Huckleberry Finn (1885) の結末において、語り手 Huck はテリトリーの彼方へと逃げ出す。奴隷制に支えられた「文明」社会から逃走する Huck の姿は、南北戦争中、兄 Orion について西部準州へと旅立った Mark Twain こと Samuel Clemens の姿と重なる。Clemens 青年は、南北の対立から距離を置いた西部で、作家 Mark Twain としての人生を始めたのであった。この意味で、Twain にとって西部は、自身の転生を可能にした地であると言える。それは、西部の持つフロンティアの神話性によるところも大きい。ただし、Twain にとっての西部は極西部のフロンティアに限らない。*Adventures of Huckleberry Finn* 及び関連作品群において、故郷ハンニバルをモデルとした奴隷のいる共同体セント・ピーターズバーグもまた、「西」に設定されており、Twain は暗に南部人としての過去から距離を置いている。Twain の作品世界において、地理の定義は彼自身の奴隷制についての信条を巡る葛藤を反映し、恣意的になされている。本発表では、Twain の作品世界におけるこうした地理学の恣意性を踏まえ、*Huckleberry Finn* の後日譚 *Tom Sawyer Abroad* (1894) の舞台である架空のオリエント世界を分析してゆく。

Tom, Huck, Jim の3人が気球に乗って大西洋を越えサハラ砂漠を横断する *Tom Sawyer Abroad* は、そ

の時間的・空間的描写の粗雑さや、少年たちを喜ばせるような冒険のエピソードを前面に押し出した展開から、経済的困窮をしのぐために出版された完成度の低い作品として捉えられてきた。Ernest Hemingway によるあまりにも有名な *Huckleberry Finn* 批評に則るならば、その後日譚である本作品は、一見 *Huckleberry Finn* 後半部に見られる Tom の強引な悪ふざけと Huck の追従、道化扱いされる Jim という関係性を引き継いでいるように見える。先行研究による批判の多くも、登場人物たちの魅力の無さに向けられている。また、白人である Tom と Huck が、黒人である Jim を従えてサハラ砂漠、エジプト、聖地を気球で巡り、珍しい風物を文字通り上から見下ろして回るといった筋立てから、帝国主義的姿勢を読み取る先行研究も存在する。しかし、気球の旅に有頂天になった Tom が、綴りを間違え *erronort* (正しくは気球操縦士 *aeronaut*) と署名して見せることに象徴的に示されるように、この作品は自己言及的にその帝国主義的冒険の虚偽性を示している。Twain は、1867年に Quaker City 号の乗客として聖地巡礼の旅に出、その様子を旅行記 *Innocents Abroad* (1869) にまとめているが、かつて実際に中東を訪れた Twain が、約30年の時を経て描いた地は、夢とも現ともつかぬ「アラビアン・ナイトの世界」であった。この擬似オリエント世界が、Huck が逃げ込んだテリトリーの彼方であるのなら、そのつかみどころのない非現実性こそ、世紀転換期の Twain の人種の他者に対する信条的揺れや、奴隷支持者としての過去を巡る葛藤を表しているのではないか。作中に展開する擬似オリエント世界を分析しながら、筏から気球に乗り換えた Mark Twain が、フロンティア神話以後のテリトリーをいかに描出したのかを考察していきたい。

司会 山口ヨシ子

3. Edith Wharton の戯曲創作の試み と初期小説

京都大学(院) 野末幸子

Edith Wharton (1862-1937) は、作家としてのキャリアの初期に戯曲のスタイルで言葉を生み出す経験を重ねている。初期の短編集 *The Greater Inclination* (1899) 所収の“The Twilight of the God”と *Crucial Instances* (1901) 所収の“Copy”はそれぞれト書きとダイアローグだけで書かれている。1900年頃には、これらの他に少なくとも二つの戯曲を執筆していたよう

だ。さらに、Abbé Prévost の *Manon Lescaut* (1731) の舞台化の脚本、Hermann Sudermann の *Es Lebe das Leben* (1902) の英語上演時の翻訳なども手がけている。

Wharton は、自伝では語っていないが、晩年に至るまで戯曲の創作を試み続けていた。しかし、それらの作品が生前公表されることは一度もなかった。死後に残された未完の戯曲の草稿には、実際に出版された小説に使用されているモチーフや題材が見え隠れするものもあり、Wharton は小説を書くための習作として戯曲を書き続けていた可能性もある。

1900年5月の彼女の手紙には、“The Tightrope” という作品の上演計画が進んでいたことが記されている。R.W.B. Lewis は、この作品が *The House of Mirth* (1905) の演劇版だったのではないかと推測している。“The Tightrope” の草稿は現存せず、Lewis の説は根拠に乏しいものの、Wharton の小説が生成される過程において、戯曲の創作が大きな役割を果たしていることはまちがいないだろう。先行研究でも指摘されているように、*The House of Mirth* は、作品の構成から登場人物造型、物語に用いられているモチーフなどに演劇的要素が色濃く表れている小説である。ダイアログが比較的多いのもその影響かもしれない。(Wharton が1925年に発表した *The Writing of Fiction* では、ダイアログは小説全体におけるスパイスのようなもので控えめに使用されるべき、という趣旨のことが書かれている。)

Wharton は自伝で、初期の代表作となった *The House of Mirth* の出版後、“a drifting amateur” から “a professional” になったと述べているが、同時に、“I don't yet know how to write a novel; but I know how to find out how to.” と当時を振り返っている。この点において、*The House of Mirth* は、Wharton が作家としての活動初期にどのように小説を書く方法を模索し、その言葉と世界を生み出していったのかについて考える上で非常に興味深い。今回の発表では、戯曲の創作の試みとの関連から、*The House of Mirth* 以前に書かれたいくつかの短編についても合わせて検討してみたいと思う。

4. セッションなし

第4室 (吉田南総合館北棟2階, 共北28)

司会 越智博美

1. Ellen Glasgow の戦略的 sisterhood ——Allen Tate と H. L. Mencken との書簡から

大谷大学 種子田 香

Ellen Glasgow (1873-1945) は若い頃に聴力を失ったため、第三者の手助けを必要とする会話よりも、文通を好んだ。彼女は多くの手紙を残しており、そこからは作家の評価が批評家との個人的つながりによって、いかに左右されるかを垣間見ることができる。

Glasgow の文通相手に南部文壇を代表する批評家 Allen Tate と、舌鋒鋭いことで有名なボルティモアのジャーナリスト、H. L. Mencken がいるが、この二人はアメリカ南部に関して正反対の思想的立場をとっていた。Mencken は南部がダーウィニズムを受容しようとしないうことは、南部の後進性を物語っていると述べ、1925年のスコプス裁判 (Scopes Trial) を「猿裁判」(monkey trial) と揶揄した。それに対し、Tate は、南部の伝統的な価値観は科学とは相容れないものであるがゆえに、そこから後進的であると結論付けることはできないと反論し、一般的にはこの裁判をきっかけにして農本主義者に転向したと言われている。

Glasgow は、このように意見が激しく対立する二人の批評家と文通を続け、友人として心を通わせるようになるが、その遠因として彼女と二人の妻たちとの間に女性同士の絆 (sisterhood) があったことが挙げられる。Tate の妻 Caroline Gordon と、Mencken の妻 Sara Haardt はともに作家活動をしていたが、作品を創作するにあたって Glasgow に敬意を払っていた。特に Sara は夫を通じて Glasgow のサイン入りの著書を受け取り、愛読し、創作の手本とするなど、公私ともに Glasgow に傾倒していた。つまり、Glasgow は妻たちを味方に付けることによって、Mencken や Tate と友好を深めることができ、文壇での自身の評価を高めることにつながった。Mencken と Glasgow は1926年に初めて顔を合わせるが、それ以前の1925年に出版された小説 *Barren Ground* について Mencken は、貧困が描けていないと酷評していた。しかし Sara の仲介で親交が深まった後に出版された Glasgow の *Vein of Iron* (1935) は、彼女の最高傑作という Mencken の高評価を得た。

白人男性の批評家が中心的役割を果たしていた当時のアメリカ南部文壇において、批評家の妻を味方につけるという戦略は、独身女性作家 Glasgow が成功するのに大いに有効な手段であった。本発表では、Glasgow にとって sisterhood がいかなる重要な意味を持っていたかを、*Barren Ground*, *The Sheltered Life* (1932) の二作品に加えて、とりわけ書簡から考察したい。そして、Glasgow と批評家の妻たちを結びつけた sisterhood が、1942年のピューリッツァー賞受賞に至る Glasgow の作家としての評価や経歴がいかなる影響を与えたのか、検証したい。

司会 森 慎一郎

2. 白い少年と黒い友達——*The Grass Harp* にみるアメリカ南部における人種差別と平等への希求

東北大学(院) 徳永 慎也

本発表では、作家 Truman Capote (1924-84) の *The Grass Harp* (1951) を取り上げ、アメリカ社会における人種差別に向けられた批判を考察する。アメリカ南部出身であるカポーティは、南部にある不気味な屋敷を舞台にした初長編 *Other Voices, Other Rooms* (1948) や南部の牧歌的な自然を舞台にした *The Grass Harp* といったフィクション作品を執筆した。白人少年の成長物語である両作品において、カポーティはアフリカ系市民をも描いている。特に、後者は「昼の文体」によって描かれるのどかな自然を背景に、アフリカ系女性キャサリン・クリークが受ける人種差別に苦悩する白人たちの姿を読み取ることができる。昼の陽光の陰に深い苦悩が描かれているのである。また、カポーティは、1955年にソ連において公演したアフリカ系アメリカ人歌劇団に同行取材して作品化した *The Muses Are Heard* (1956) を発表する。本作品において彼は、米ソ対立構造の中において「自由」を主張するアメリカが国内において人種差別を抱えているという矛盾を浮き彫りにしている。

カポーティ作品を論じる際に、多様な文学的スタイルだけでなく、内容に注目すれば、「黒人」は中心的登場人物である。しかしながら、先行研究においてはカポーティ作品における黒人についての考察はほとんどなされていない。また、社会的政治的背景にカポー

ティ作品を位置付けようとする試みはなされてこなかった。そのような状況の中、Thomas Fahy は *Understanding Truman Capote* (2014) において、カポーティ作品を英文学の授業で読まれる作品として位置付けることを目的にし、カポーティ作品を当時のアメリカ社会や政治から読解することを試みている。

確かに、カポーティが作家として活躍した第二次世界大戦後から1950年代、60年代はまさに激動の時代であった。第二次世界大戦後、アメリカ合衆国が繁栄を誇る大国として存在感を示す一方で、国内においては人種差別や貧困などの問題を抱えていた。アメリカはソ連を脅威とみなし、対外的に自国が「自由の国」であることを主張する一方、国内においては分離政策に代表される人種差別が存在した。「自由の国」アメリカが抱える矛盾は、1950年代におけるアフリカ系市民が平等を求めた運動となり、60年代に入りさらに勢いを増していく。また、アフリカ系市民が平等を求める運動は、彼らだけの権利ではなく、他の人種のマイノリティや女性、同性愛者など当時抑圧的な立場にあった人間たちが市民的権利を主張する運動につながっていく。

フェイはカポーティ作品を読み解く際に抑圧的な冷戦期文化を参照し、赤狩りに代表される冷戦期の雰囲気がかポーティ作品に及ぼした影響を考察している。しかしながら、カポーティ作品に描かれる平等への希求は明確に論じられていない。そのため、初期作品から『冷血』までのカポーティ作品を人間が自由に生きる平等な権利を求めた運動に位置づける必要がある。そこで本発表では、*The Grass Harp* を取り上げ、語り手である白人少年コリン・フェンウィックが意識的に人種差別への苦悩を語る点から、コリンが人種差別を批判しているだけではなく、具体的な行動につながっていく可能性を考察し、作品に描かれた平等への希求を読み解く。

3. F. Scott Fitzgerald と宗教——*The Great Gatsby* とモダンな信仰

信州大学 杉野 健太郎

高度消費社会の先駆けとなったジャズ・エイジの寵児 F. Scott Fitzgerald と宗教というトピックを掲げると、あるいは Fitzgerald のいくつかの作品は James Joyce の *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) との比較研究に値するなど書くと、怪訝に思われるかもしれない。しかし、Fitzgerald の主要作品とりわ

け *The Great Gatsby* (1925) における宗教というトピックはその読解を刷新する可能性を秘めているのではないかというのが本発表の意図である。

Fitzgerald は、アイリッシュ・カトリックの強固な基盤のなかで育ち、プリンストン大学時代までは教会に通っていたという。この時期は、ニューマン・スクールで Fitzgerald に大きな影響を与え、デビュー作 *This Side of Paradise* (1920) のダーシー神父のモデルとなり Fitzgerald をカトリック信仰へと繋ぎとめていたと推察されるフェイ神父が亡くなった1919年とおおよそ符号する。

Leslie Fiedler は、「Fitzgerald の小説には、宗教的洞察はなく、あるのは宗教的装飾 (décor) のみだ」と1955年に書いている。また、Matthew Bruccoli はその伝記において、Fitzgerald は成熟期までに完全に信仰を捨て *The Great Gatsby* にはカトリシズムはないと書いている。だが、習作を基にした“Benediction”

(1920) と *The Great Gatsby* の最初期の構想に入っていた“Absolution” (1923) に「宗教的洞察がないなどと誰が言えようか。また、Gatsby に信仰がないなどと誰が言えるのだろうか。では、Gatsby は何を信仰していたのか？」

本発表は、Paul Giles の *American Catholic Arts and Fiction* (1992) の *The Great Gatsby* が「Fitzgerald のカトリシズムの諸神話に関する最も深い謎に満ちた瞑想」であるという説をひとまずは受け入れる。しかし、Giles は、無時代的なカトリシズム、カトリック＝プロテスタントの二項対立にとらわれ過ぎており、また宗教を狭くとらえ過ぎているのではないだろうか。そして何より、宗教モダニズムとでも呼ぶべき歴史への配慮を欠いているのではないだろうか。宗教モダニズムとここで呼ぶのは、Fitzgerald に大なり小なり影響を与えたと推測される二つの宗教モダナイゼーションの動きである。一つは、宗教文化学者 Tracy Fessenden の *Culture and Redemption* (2007) が指摘したような、Fitzgerald がその強い磁場のなかで成長したと考えられるカトリック・モダニズムである。カトリック・モダニズムとは、近代社会とカトリック教会との緊張感のなかで19世紀末にフランスで起こり、アメリカでは Fitzgerald の誕生から成年期をカバーする1888-1918年にセントポール大司教だった John Ireland が主唱者であり、最終的に1910年に教皇ピウス10世により鎮圧されたが、後の第二バチカン公会議 (1962-65) の先駆きの運動である。もう一つは、メンケン＝ニーチェ・コネクションとでも呼ぶべきものである。Fitzgerald が H. L. Mencken を同時代最高の文学者と賛えその *The Philosophy of Friedrich Nietzsche* (1907) を *A Portrait of the Artist as a Young Man* とともに「私が読んだ最高の10冊」(1923) にあ

げ、またニーチェからの直接的影響も否定しがたいにも関わらず、このコネクションは、軽視いや無視されてきた。本発表では、とりわけ後者すなわちメンケン＝ニーチェ・コネクションの影をテキストに見出しながら、それを *The Great Gatsby* の読みの刷新へとつなげることができればと考えている。

司会 田中敬子

4. アナクロニズムという理性——

Go Down, Moses における汚辱の膨張

立教大学 新田啓子

合衆国南部史の泰斗 C. Vann Woodward は、“The Fall of the American Adam” (1981) と題する口頭発表論文において“the burden of innocence is heavier than the burden of guilt” という興味深い一節を引用しつつ、「潔白意識」から「罪責意識」へ極端にシフトした当時の米国史観を批判的に論評している。引用元は彼の友人 Robert Penn Warren の *Brother to Dragons* (1953, 1979) であるが、Woodward は、歴史認識を左右するこの自意識の拮抗は、文学の分野では伝統的に処理されてきたアメリカ特有のテーマであり、なかでも Warren によるその扱いは卓越していると述べている。

本発表は、この二重意識の解明という切り口を活用し、Warren もさることながら、*Go Down, Moses* (1942) において William Faulkner が示した重要な真理に照準をあわせ、その構図の委細を明らかにしようと試みるものである。潔白と罪責の相克とは、結局アメリカの繁栄の裏面としての征服・抑圧・破壊に由来する問題にはかならない。特に Faulkner にあってそれは、南部人・黒人・混血児なるものを作った固有の「風土的経験」、さらには否定性を耐え忍びつつ生き存えねばならなかったそうした人々の宿命を意味づけるべき、一つの枠を形成している。

いふならば、この二つの意識の相克を独り南部の問題だとは見なしていない点に、*Go Down, Moses* の特徴がある。あらゆる記録を凌駕する古さと広さを誇り、いかなる人知にも取り込まれ得ぬ「荒野」、「大森林」を舞台とすることで、Faulkner はむしろ、南と北を争点化した未定型の政治的空間、つまり「西部」を表象している。「奴隷州」という客観性から線引きされた地域ではあれ、南部はもとより地理的本質をもつ

場ではない。しかもその地で Isaac McCaslin が成長するのは、再建期とされている。それはすなわち、再び Woodward の言葉でいえば、「先住民の強制移住と、解放奴隷への農地供与の失敗」により銘記される時間性、ひいては北（連邦）の拡張を、裏切りまたはコロナイゼーションとして甘受するという共通性から、西と南を結びつけた歴史の断面に相違ない。西と南の連続性とは、南北戦争終戦後に主権を得、国家を代表することになった一つの立場の罪責性を、浮き彫りにする枠組みであるのだ。

しかし Faulkner は、そのような枠組みから、なんであれ己の属する潔白性に類するものを絞り出そうとしたのではない。ある角度からは、無垢の象徴とも見えるように描かれた大森林が、実は汚され、侵されることが予定された呪われた地であったということ。また Isaac の自我形成の「母校」とされた Old Ben も殺害される運命にあり、さらにこの崇高化された獣の殺しが、マキャスリン農場の土地台帳に記された、呪われた事実の解読ならびに Isaac の相続拒否を導いていること——こうした因果の構想を通じ、作家はいわば、合衆国の膨張を自己批判的に見渡す視座を早くも獲得したのではないか。奴隷制が南部に遺した恥辱との向き合いが派生させたこの視座の意義を、熊の本質の謂いとされた「アナクロニズム」という概念から考察してみたい。

第5室（吉田南総合館北棟3階、共北31）

司会 鎌田 禎子

1. Aaron Douglas の失われた壁画と アフリカ人 Estebanico の新大陸 探検物語

東京理科大学 深瀬 有希子

ハーレム・ルネサンスの代表的画家であった Aaron Douglas は、1930年代に入ると壁画制作や教職のため、テキサス州やテネシー州さらにはパリに拠点を移して活動を続けていた。例えば1936年に開催された The Texas Centennial Exposition に設けられた The Hall of Negro Life を飾るべく、Douglas はアフリカ系アメリカ人の歴史を描く壁画を制作した。完成した計四枚の作品のうち二枚は現存せず、またさらに残念なことに、連作の一番目の作品については写真等による記録もな

い。しかし、本展覧会およびバーネット - エイデン・ギャラリーのキュレーターであった Alonzo Aden の説明によると、失われたうちの一枚は、16世紀にテキサスを探検したアフリカ人 Estebanico を描いた作品であったという。本壁画が実際にどのような構図や色彩を呈していたかを知るのは難しい。けれども少なくとも Douglas にとっては、新大陸を初めて探検したこのアフリカ人こそ、テキサス誕生を祝すにふさわしい人物であった。

本発表では、Douglas の失われた壁画を想像し Estebanico を忘却から救い出すべく、作家の出自も執筆された時代も異なる三つのテキストを参照したい。まず一つは16世紀スペイン人 Álvaro Núñez Cabeza de Vaca によるフロリダ-テキサス探検の記録 *Naufragios* [*Shipwrecks*] (1542)、もう一つは16世紀ニューイングランドと大西洋奴隷貿易を描いた Toni Morrison の *A Mercy* (2008)、さらにはモロッコ系アメリカ人作家 Laila Lalami の第三作目の小説 *The Moor's Account* (2014) である。Cabeza de Vaca による新大陸探検の記録にはモロッコ人 Estebanico についての言及は少なく、奴隷であった彼自身の言葉は歴史的資料として残されていない。それに対して Lalami の本作品では、Estebanico の一人称の語りによって、彼が奴隷になった経緯からフロリダ-テキサスを探検し自由を求める姿が描かれる。今回の発表では、ネイティヴ・アメリカンのなかで Estebanico が生き残るための策として用いた薬用植物による治療術や、Morrison が描くアフリカ人男性が白人女性に施す天然痘治療のための接種の技術などを比べながら、植民地文学や奴隷体験記の伝統のなかでこれらの作家たちが用いた、アフリカの行為や存在をアメリカへ移植する手法について論じる予定である。

司会 松本 昇

2. “We Deeply Need Each Other” ——James Baldwin の *Blues* *for Mister Charlie* における Connectedness の倫理学

立教大学 石川 千暁

小説家、ノンフィクション作家としておもに知られる James Baldwin による戯曲 *Blues for Mister Charlie* (1964) は、1955年の Emmett Till のリンチ事件にイ

ンスパイアされて着手された。『白人のためのブルース』と訳される本作は、白人 Lyle による黒人 Richard の殺害を軸として展開する物語であるが、アメリカ社会における人種の正義の不在を白人のためのブルースと見なす行為には、黒人の苦しみは白人の苦しみでもあるという著者の倫理的確信が表現されていると考えられる。前書きでリンチ犯について「その男のなかの何かが自分のやっていることは邪悪であると知っている—知っているに違いない」(Blues xiv) と綴り、人間の倫理性に信頼を置く Baldwin は、人種によって分断されたアメリカ社会の未来への希望を、政治的な利害関係を超えた人間同士の根源的なつながりの状態 (connectedness) に託しているのである。

本発表は、時期をほぼ同じくして書かれたエッセイ *The Fire Next Time* (1963) を参照しながら *Blues* を読むことで、*Blues* の根底に流れる Baldwin の倫理的問題意識の所在を詳らかにする。具体的には、まず、*Fire* における connectedness 思想の内実を検討し、Baldwin が当時台頭していたブラックムズリムの闘争的アクティヴィズムに一定の価値を認めつつも、ブラックナショナリストの分離主義には明確な反対の意思を表明していることを確認する。そしてまた、圧倒的な黒人への嫌悪と暴力を前にして、それでも Baldwin は「不屈」の精神と呼ぶものを持って生きてきた黒人の歴史に希望を見ているということを強調する。その上で *Blues* の読解に入ることで、黒人に対する暴力が許容される社会にあってもなお、白人との connectedness を忘却しないように説いていると主張する。

そのような *Blues* 解釈は、反抗的な Richard を Baldwin の内なる闘争性の現れとして賞賛する傾向のある先行研究の数々に反論することになるだろう。本作は小説ではなく戯曲であり、一人の人物を著者の化身と捉えるよりは、複数の声が並列されている点にこそ注意が払われるべきだと思われる。この点において、他の人物のフラッシュバックを多用することを通して Richard の姿を観客に提示する *Blues* の実験的方法論が、彼を取り巻く共同体の絆を前景化させているとする Koritha Mitchell の指摘は鋭い。Mitchell はさらに、実験性を用いてしか表現されようのないリンチの破壊的な痛みが「人間のつながりを再発見しなければならぬ」という「倫理的命令」(Mitchell 56) を示唆していると論じるのだが、リンチのもたらす痛み自体にそのようなメッセージ性はあるだろうか。Baldwin の倫理観はむしろ、きわめて具体的に、作品結末における Lyle の憎悪に満ちた告白に対する黒人人物たちの奇妙なほど静かな受け入れによって示されているのではないか。リンチの恐怖によっても、それを容認する社会の不正によってもくじかれず、非暴力に徹して抗議の行進を行う黒人たちの姿に。

3. Pauline Hopkins の *Hagar's Daughter* と Sutton E. Griggs の *The Hindered Hand* における探偵の可能性——犯罪・人種・正体を看破する

慶應義塾大学 奥田 暁代

「分離すれども平等」判決を連邦最高裁が下したのは1896年だった。これは、白人専用車両の切符を購入し乗車していた Homer Plessy が、車掌の問いに答えて黒人であることを明らかにしたことから、白人と有色人種は別々の車両に乗ることを規定した法律に違反したと逮捕された事件である。見た目は白人の Plessy があえて黒人と宣言して逮捕されることによって、Albion W. Tourgée ら弁護団は、人種によって車両を分けるという州法は、誰が「白人」で誰が「黒人」かの正確な判断ができないのであれば、公正な法の執行は不可能で、そのような法律は憲法修正14条を骨抜きにしてしまうため無効にすべきと訴えたのである。

Colored American Magazine 誌に連載された Pauline E. Hopkins の *Hagar's Daughter: A Story of Southern Caste Prejudice* (1901-1902) と、Sutton E. Griggs の *The Hindered Hand; or, The Reign of the Repressionist* (1905) は、どちらも、このような人種区分の有効性を問い、「黒人」であることは看破できるのか追求する。Hopkins が1900年に発表した短篇の“Talma Gordon”は、アフリカ系アメリカ人作家による最初の推理小説として知られ、*Hagar's Daughter* では黒人女性が探偵しながら調査に乗り出し、誘拐されていた女主人救出に成功する。他方 Griggs が同時期に書いた5つの文学作品は政治小説と呼ばれても、推理小説として語られることはない。しかし、婚約者を殺害された白人男性が黒人になりすまし真実を追う、鉄道で働く黒人男性が賞金を目当てに蒸発した白人女性を追う、といった展開は、犯罪の捜査と解明を中心に据えた探偵小説に通じる。

Hopkins と Griggs はこれらの小説を通して、殺人や誘拐といった犯罪だけでなく、リンチ（白人が黒人に対して行う法の定めには罰しない制裁）やパッシング（南部白人から見れば社会規範には罰しない黒人の逸脱行為）を究明し解決策を突き詰めようとする。そして、奴隷制度から続く人種差別と、南部で定着しつつある分離政策、といったより大きな「犯罪」についても探究しようとする。そもそも誰が「黒人」であるか明確

でないときに、区分を設け片方の権利を剥奪するのは合法なのか、読者に問いかける。いくつものストーリーが絡み合う複雑な構成の両作品を、合理的な解決を提示するはずの探偵小説として考察することによって、世紀転換期にアフリカ系アメリカ人作家が何を目指したのか、悪化していく人種問題にどう対処すべきと訴えたのか、明らかにしてみたい。

4. セッションなし

第6室（吉田南総合館北棟3階、共北32）

司会 越川芳明

1. Vonnegutの愛した方程式—— *The Sirens of Titan*における “Vonnegut”

大阪大学（院）三宅一平

Kurt Vonnegut Jr. (1976年出版の *Slapstick* 以降は Kurt Vonnegut 名義) がしばしば用いる手法として、作者の物語への侵入が挙げられる。時に作者は Vonnegut という名前を伴って作中に現れ、自伝を物語と並置することにより現実と虚構の境を曖昧化する。この手法は特に *Slaughterhouse Five* (1969) 以降に顕著であるが、*The Sirens of Titan* (1959) においてもこの手法が扱われている。William Rodney Allen はこの作品について、一貫性をもつ中心を欠いていると批判しているが、本作においてはまさにこの中心のなさこそが重要な意味を帯びる。本発表では *The Sirens of Titan* における「作者」を分析し、Vonnegut によってデザインされるカオスがいかなるものであるか明らかにしたい。

本作においては、作者 Vonnegut の名が直接言及されることはない。だが書誌情報と同頁に書かれた、「本書中の人物、場所および事件は、全て実在する」という記述、また作品の語り手が、過去を語る物語世界内の人物であることに鑑みると、この語り手を Vonnegut と同定することも可能である。その一方で、この語り手は物語内世界の人物では知り得ないことを語る、全知の語り手の視点をも有している。つまり、ここでは複数の人格が“Vonnegut”という名前に集約されるかたちをとっており、ここで Vonnegut は作中

にも作外にも同時に存在することになる。“Vonnegut”という一つの名称に、複数の指示対象が混在したこの手法は注目に値する。

この混在の様は、作中人物である Malachi、後の Unk の表象からも読み取れる。Malachi は記憶を消され、物語の途中から Unk として存在することとなる。Unk となった後もまた、彼は記憶を消されることとなるのだが、彼は記憶を消される前に自身に宛てて手紙を書き、それによって以前の人格を取り戻す。Malachi、手紙を読む前後での Unk は、それぞれ全く違った人間であるかのように描かれており、身体という容器に人格を入力することによって、一つの身体でありながら複数の異なった人格を獲得しているのだということが読み取れる。

こうした描写から、「身体」と「人格」の関係を、変数を伴った方程式として論じることができるだろう。つまり、人格や精神を変数として“Vonnegut”という方程式に代入していくのである。この概念を援用することで、一見すると同じ姿に見える物の、本質の差異にアプローチできるだろう。代入する数値が変われば、出力される数値も変わる。本作品において見られる複数の次元に同時に存在する「作者」は、そのような方程式の変数に多様な数値を代入した計算結果として読み取ることが出来る。

さらに、作中で語られる新宗教における人々に無関心な神という描写に注目し、作品の創造主としての作者を仮定するならば、Vonnegut 自身が本作品に対する影響力を放棄し、自らと切り離さんとする姿勢が読み取れる。つまり、*The Sirens of Titan* という数値を代入された“Vonnegut”を独立させているのである。

以上の点から複数の人格を伴った“Vonnegut”というシステム網を構築し独立させ、決定不可能なカオスに留まり続ける、身体を伴った Vonnegut を論じることで、意味の定着を限りなく引き延ばし、固定された価値を排除するテキストとして本作を提示したい。

2. 失われたアウラを求めて——

The Glass Chronicles における

メディア論的転回

流通経済大学 野口元康

複製のために写本していた時代からグーテンベルクの活版印刷を経て現在の書物の形態が確立し、書物が大量に流通するようになった近代まで、書物はアウラを帯びていた。本を開くと、装飾の施された文字が目飛び込み、頁の余白にも美しい装飾が視界に飛び込

んでくる。現代の雑誌上では商業広告がこれらの装飾にとって代わる。J. D. Salinger が生前最後に発表した“Hapworth 16, 1924” (1965) は、活字アルファベットの文字列を閉じ込めた書物の大量複製と、アルファベットを配列して原稿に印字するタイプライターの発明との後に待ち受けている文学の運命を劇的に表象している。

作品発表媒体 *New Yorker* 誌面において、読者はイラストや広告によって読書行為を阻まれながら、余白に書かれた Seymour の手紙を辿るように要請される。作品が始まる32頁から40頁まではニュー Yorker 風のイラストが入り、本文は三段組となっている。41頁からは作品本文が余白に追いやられ、一段のみ掲載されることもある。頁全体が広告に使われ物語の流れが遮断されることもある。50~51頁の見開きに注目すると、50頁の三分の二に相当する左側は、上部が Baker Furniture, Inc の家具調度品で飾られた内装の写真、下部は Martin's 社の八年物のスコッチの広告から成っている。作品本文は頁右側の余白に一段組で掲載されている。51頁は American Express 社の広告写真が上半分以上を占め、写真の下部には三段組で会社のサービスを伝える文章が掲載されている。しかもこの三段組のフォントサイズが作品本文より大きいために、小説言語が広告の間に挟まれた夾雑物という印象を受ける。

以上の状況をメディア論的に分析すると、Seymour が7歳の頃に紙の上に刻印した筆跡（痕跡）は、Buddy のタイプライター上で規格化された印字によって分解され、商業広告の隙間に配置されるよう雑誌の一部として編集され、一回限りの手紙が複製技術により大量に印刷されて流通している。“Hapworth 16, 1924” からメッセージを読みとるには、アウラ崩壊の物語とはベクトルが反対の＜アウラの復活＞へと廻行する鑑賞態度が求められる。

本発表では、掲載空間を巡る小説と広告の抗争という従来にない発想から *the Glass Chronicles* におけるメディアに注目する。*the Glass Chronicles* において、ラジオや TV など時代の変遷を象徴的に表現するメディアが重要な役割を果たしている。“Raise High the Roof Beam, Carpenters” (1955) において、声を遠方へ不特定多数の聴衆へ届ける拡張メディアであるラジオに対し、自己に語りかける極めて私的なメディアである日記が用いられる。“Zoocy” (1957) では小説の語り散文による家庭映画に、“Seymour: An Introduction” (1959) ではスナップ写真に喩えられる。20世紀のメディア技術の変遷による知覚の変容が、アウラの復活へと向かう表現様式を小説言語に要請していることを論証したい。

司会 町田 哲 司

3. Bernard Malamud の *The Tenants* におけるアフリカニストの存在

安田女子大学(院) 竹原 遙

Toni Morrison は、*Playing in the Dark* (1992) における研究の中で、「アフリカニストの存在は、強引でかつ避けようもないやり方で、アメリカ文学のテクスチュアに生命を吹きこんでいる」と述べている。さらに、アフリカニストの存在について「暗い永続的な存在」であり、「アメリカの文学的想像力にとって、同時に目に見えかつ目に見えない媒介力として働く」と定義を続けている。

本発表では、*Playing in the Dark* の中で Morrison が述べた、批判的研究のための4つの研究課題のうち、特に第1・第3に挙げたものを取り上げながら、Bernard Malamud (1914-86) の作品の中で、アフリカニストの登場人物が、媒介力、つまり、「代理人および力を授けるもの」として、どのように機能しているかという問いに焦点を当てる。さらに、Malamud だけではなく、その他のユダヤ系作家たちにとっての「白さ (whiteness)」の意味を精査するために、アフリカニストの登場人物たちがどのように機能しているかについて考察する。(時間が許せば、Saul Bellow や Philip Roth についても簡潔な考察を行いたい。)

Eric L. Goldstein が *The Price of Whiteness* (2006) において指摘しているように、ユダヤ人と「白さ (whiteness)」の間には、複雑で、不確かで、相容れない関係があり、ユダヤ人はしばしば、黒人と自分たちを区別することで、自分たちの「白人」としての地位を決定することが強いられていた。しかし、その一方で、ユダヤ人たちは彼らの民族が経験した迫害を背景に黒人と自らを重ね合わせ、黒人に対して同情を感じていた。さらに、ユダヤ人は「白人」社会で地位を得ることに対する欲望と、「白人」社会に同化する過程で希薄化してしまった民族的独自性との間にジレンマを感じていた。

Malamud にとっては、アフリカニストの存在は二つの異なる相容れない機能を果たしている。一方は、父親的あるいは兄弟的な黒人との関係が、ユダヤ系の登場人物に人種的「他者」に同調することを許し、さらには、民族的相違や独自性（「白人」社会への同化の過程で失ったもの）を際立たせる機能である。もう一方は、黒人とユダヤ人を差別化することで、ユダヤ系の登場人物をより大きな「白人」社会に同化させる機能である。本発表では、Malamud がこの作品におい

て納得のいく結末を書けなかった原因とも言える、二項対立する衝動の緊張関係とどのように関わったかを解明するため *The Tenants* (1971) に焦点を当てる。

4. Failure, American Style: *Herzog*, *A Serious Man*, *Greenberg*

安田女子大学 Taras Alexander Sak

“Failure, American Style” is a book-length project that builds upon classic studies, such as Martha Banta’s *Failure and Success in America: A Literary Debate* (1979), as well as more recent interventions, such as Scott A. Sandage’s *Born Losers: A History of Failure in America* (2005), Gavin Jones’ *Failure and the American Writer* (2014), and David M. Ball’s *False Starts: The Rhetoric of Failure and the Making of American Modernism* (2014), in order to explore what I term an “aesthetics of failure” that is peculiarly American. In his important study, Jones argues that “failure is one of the central tropes of the American literary imagination,” which would seem to be at odds with the larger culture since American society has been, and continues to be, structured around the concepts of “success” and “victory.” How might we account for Poe’s obsession with “the perverse,” Melville’s identification with “the vanquished,” Fitzgerald’s idea of the “authority of failure,” or Bellow’s pantheon of tragicomic schlemiels? What do we make of the disastrous professional (and personal) trajectories of Poe, Melville or Fitzgerald—or their subsequent canonization in our own time? I argue that an American aesthetics of failure would help us approach these and other crucial questions. In my presentation, I will focus upon one chapter of the monograph, in which the seemingly “successful” Bellow—winner of the Nobel Prize for Literature in 1976, who achieved a level of critical and commercial success unimaginable to the other major authors in my study—in fact reveals himself to be much more closely aligned to and in sympathy with “that suffering joker,” the eponymous hero of *Herzog*, a schlemiel of epic proportions. Before concluding, I will discuss two recent movies (unsurprisingly, neither was considered a “box office success”) that draw heavily upon *Herzog*—the Coen brothers’ *A Serious Man* (2009) and Noah Baumbach’s *Greenberg* (2010)—in order to illustrate how the aesthetics of failure

is still very much alive in American popular culture.

第7室 (吉田南総合館北棟3階, 共北33)

司会 本 城 誠 二

1. 物質と記憶——Paul Auster の *The Book of Illusions* における 「シネマトグラフィー」

大阪大学 (院) 植 村 真 未

映画というものは、映写機やフィルムを使用し我々の眼前に像を映し出すが、その実体はどこまでも曖昧である。それは光源から放たれた光の道にあるのか、スクリーン上にあるのか、はたまた記憶の淵にあるのか。本発表では *The Book of Illusions* (2002) にメタファーとしての「シネマトグラフィー」を読み込み、本作品に漂う幻影性が、実際のところ多様なかたちで物質性、肉体性を帯びた物質なしには成立し難いことを明らかにしたい。

The Book of Illusions を構成する Zimmer, Hector の人生に加え、Hector 失踪前の重要作である *Mr. Nobody* における Hector の三者を詳細に考察すると、彼らを取り巻く様々な物が彼らの人生の幻影性を効果的に引き立てていることがわかる。Hector においては映画や、ブルー・ストーン農場に移った後の生活に物理的環境が大きく影響する。Zimmer もまた遺品という物により亡き家族の亡霊という幻影を立ち上げる。また肉体という物質による影響も見逃せない。と言うのも、Hector のサイレント映画は彼の巧みなボディコントロールが大きな特徴であり、Hector 自身の人生はその肉体を隠すことが失踪につながり、それによって新たな人格を得るというイリュージョンが成し遂げられるからである。

そのような物質の中で、とりわけ物語の展開に大きく関わるのが銃である。それに対する幻影的なものとして逆に穴が前景化される。このように物語中盤で登場する銃は、穴を通して現実世界から幻影世界への越境を引き起こす。ブルー・ストーン農場で Zimmer の身に起こったことはあくまで現実として描かれていながらも、異界性が強く極めて幻影的である。その異界性を強めているものの一つに Zimmer の認識の変化が挙げられる。彼が現実世界としてのニューヨークか

ら、幻影世界としてのニューメキシコへ移った際、彼の認識には変化が生じる。幻影世界においては Zimmer の視覚による認識が曖昧なものとなる。またブルー・ストーン農場ではコミュニケーションツールとして手話が用いられるが、Zimmer は手話を解さないためにそこでのコミュニケーションの輪から締め出されている。このこともブルー・ストーン農場の異界性を強めていると言える。

このような彼の認識の変化には、Zimmer の考えるサイレント映画とトーキーの違いが関わっている。手話によるコミュニケーションがなされるブルー・ストーン農場は、音声なしで成り立つサイレント映画の世界のようであり、それによって農場の幻影性がいっそう高められている。一方、視覚によるコミュニケーションツールとしては、Frieda の手紙が挙げられるが、そこでも別の意味で物質性が強調されている。Hector の映画フィルムの焼却の担い手を任せられ、それを一心不乱に遂行した Frieda だが、破壊という行為も物質があつてこそ行えるものである。このように *The Book of Illusions* の世界は、物質が強調される一方で、それらの破壊、及び欠損が、亡霊性を孕んだ幻影を生み出すのに大きな役割を果たしている。Hector が関わった様々な映画、Zimmer による Chateaubriand の翻訳、最後に死を選んだ Alma の草稿、そして Zimmer 自身が書きあげた本書 *The Book of Illusions*。幻影を醸し出す物質としてのアートなしには、死者の記憶は届かないのである。

2. *American Pastoral* における アメリカ的拒絶のメカニズム

福岡女学院中・高等学校 皆川 雅志

Philip Roth の *American Pastoral* (1997) は、確固たる主体性を持つことなく、アメリカ人としての受容と承認を得ることを専ら追い求めるユダヤ系アメリカ人三世の Seymour (通称 Swede) の価値観が、一人娘 Merry により転覆される過程を丹念にたどっている。そのような Swede の欲求はきわめてアメリカ的であり、それが拒絶されることもまたきわめてアメリカ的である。この点において、本作品が文化的、社会的な文脈においてまさに“American”なものを体現していることはごく一般的な解釈であろう。本発表では、そのような拒絶が反アメリカ的な思想の持ち主である女性によりなされるという点に着目することで、この作品における拒絶のメカニズムがこれまでとは異なる様相を呈すものであることを論じる。

Swede は高校時代にスポーツの花形選手として活

躍し、その後父の革手袋工場を継ぎ、Miss New Jersey に選ばれた女性と結婚するなど、その人生は順風満帆そのものに思えた。だが、彼の人間性にはその中核となる要素が見当たらないことが作品中でたびたび指摘される。語り手 Zuckerman は「表層の上に浮かんでくるのはさらなる表層」であり、「仮面をかぶって生きる」ようになった人間だと Swede を評する。Swede の弟 Jerry は、兄のことを「何でも丸く収めようとする」あまり「中庸」と「妥協」に走りすぎた人間だとして厳しく批判する。そのような Swede の人間性は、新たにそこに加わる者に同化を強く要求するアメリカ社会の影響を強く受けたものである。すなわち、彼は「無意識のうちにアメリカと一体」となり、「アメリカ人であることを愛していた」。その背後にあるのが、自らがユダヤ人という非主流派的存在だという意識であった。非 WASP 系の人間が社会での承認を求めるという図式において、彼の欲求はアメリカが生み出したアメリカ的な欲求であり、その欲求を満たすべく構築された彼の空虚な人間性もまた、アメリカ的な存在である。

そのような Swede の価値観に強烈な異議を申し立てたのが、Merry であった。ベトナム反戦運動とそれに伴う過激派との交わりに象徴される彼女の一連の動きは一貫して、アメリカ市民として受容されることこそが至高の幸福なのだという父親の価値観を拒むものであった。それは同時に、父親が抱くアメリカ的な欲求を拒むものでもあり、Timothy Parrish が指摘するように、「家族の歴史に国家の歴史を合体させる」ことで「父親が体現する、理想化されたアメリカの成功」、すなわち自らの力で財をなし社会的地位を確立するという成功観念とそれに伴うアメリカの隆盛を否定するものである。その一方で、Swede という非主流派の男性が抱く受容と承認への欲求を否定するという点で、彼女の存在と行為はアメリカ的なものである。なぜなら、欲求を醸成しつつその成就是拒絶するというメカニズムこそがアメリカの根幹を形成する要素の一つであり、そのメカニズムの維持に貢献している以上、その行為は結局アメリカ的なものだと見なしうるからである。そして、多くの作品に見られるように既存の富裕階級によってそれがなされるのではなく、アメリカという存在を憎み否定する Merry によってなされているという逆説は、そのメカニズムがこれまで以上に複雑かつ強固なものとなったことを示しており、そこにこの作品の本質がある。

本発表では以上の観点から、*American Pastoral* における拒絶のメカニズムが、「アメリカン・ドリームとその挫折」といった従来の枠組みに収まるかのように見えつつも、それを超える存在となっていることを指摘する。

司会 木原善彦

3. 「戦争」からのエクソダス——

Denis Johnson の *Tree of Smoke*

一橋大学(院) 青木耕平

2007年に発表され National Book Award for Fiction を受賞した Denis Johnson の *Tree of Smoke* は、作品舞台がベトナム戦争であるにもかかわらず、アカデミーの世界では「9/11以降のアメリカ」ないし「イラク戦争」を批判する射程を有した小説であるとした多くの論考が書かれている。また、ベトナム戦争小説、というよりも、「1960年代を描いた」として称されているのが現状である。

本発表は、そのような評価と先行研究を踏まえつつ、それらが論じてこなかった最終章の舞台「1983年」に着目し、小説それ自体が夥しい数の既存の「ベトナム戦争小説/映画」のパロディによって(とりわけ『地獄の黙示録』によって)成り立っていることを指摘し、*Tree of Smoke* が持つ批判射程が上記したような「ポスト9/11」/「歴史化された1960年代」として分別されうるものではなく、ベトナム戦争からイラク戦争に至るアメリカの歴史/戦争をそのまま捉える巨大なレンジを有していることを論証するものである。

本作は9章構成となっており、「第1章：1963年」から「第8章：1970年」までは各年だが、最終第9章のみがそこから一気に飛躍して「1983年」となっているが、その舞台設定が1983年であることの必然性は、テクストの表面からは一切読み取ることはできない。その完全勝利によってベトナム戦争の記憶を消しきったと言われる「グラナダ侵攻」の年でもある1983年に、レーガン大統領はソヴィエト連邦による「悪の帝国(Evil Empire)」宣言を行った。これは俗に言う1979-85年までの「新冷戦」と呼ばれる時代の象徴的な出来事であり、この「悪の帝国」発言こそが、2002年のG.W.ブッシュの一般教書演説内での「悪の枢軸(Axis of Evil)」の下敷きとなった。

そのような最終章「1983年」が描くのは、既存のベトナム文学とは違い、「帰還兵としてしかベトナム戦後を生きることのできない」者たちの物語ではなく、「戦地に留まり続けた/そもそも帰還兵になれなかった/失敗した脱走」米兵の物語である。帰還兵ナラティブの拒否、トラウマのナラティブの拒否によって立ち現れてくるのは、ベトナム戦争の「中」ではなく「輪郭」であり、アメリカに戻らないことによって常にアメリカはベトナムの「戦後」を規定する外枠となる。ベトナム帰還兵のPTSDが社会問題化した70年代、ま

だ冷戦体制真只中であった80年代では語ることの、そもそも得ることのできなかった歴史的な視座がこうして導入される。

この新たな視座を持つがゆえに、*Tree of Smoke* は「ベトナム戦争は特殊な戦争だった」という既存の小説/映画が再生産してきた神話を脱神話化する。本作の主人公、スキップとフランシスが『地獄の黙示録』におけるウィラードとカーツ大佐に似通った設定を与えられつつも、トレースではなくパロディ化されて描かれる所以はそこにある。小説最大の謎であり最後までその実態が明かされない「煙の樹作戦」の作戦名の元となったエクソダスとは、そもそもが解放と希望に満ちた「脱出」であったが、その後には彼らは「バビロン捕囚」を受けることとなる。戦争からの脱出を願いつける先に、一時期の安息はある。だが、そこから逃れることはできない、という歴史的視座の導入ゆえに、*Tree of Smoke* はベトナムとイラクを架橋する。

4. 国家像における望まれざる外国人——Thomas Pynchon の *The Crying of Lot 49*

上智大学短期大学部 永野良博

Thomas Pynchon の *The Crying of Lot 49* (1966) において、主人公エディパ・マースは公式の通信・郵便システムに対抗する非合法のシステム「トリステロ」の持つ過剰なまでの他者性がもたらす脅威に対して複雑な反応を示す。彼女の反応は、特に1960年代前半のイデオロギー的、文化的闘争の最中にあるアメリカが、国家の周辺から現れ出る異質な価値観に如何にして対応するのかという問題と係っている。エディパの想像においては、そのような価値観を代表するのがトリステロである。彼女はトリステロと反主流派との協働を見出し、その中に冷戦下の息苦しいイデオロギーからの解放の可能性を探るようになる。しかしながら彼女は、トリステロに脅威も感じる。なぜならその集団はおそらく国家転覆的陰謀に加担しているからだ。トリステロは社会変革と社会騒乱の両者に対する大きな潜在力を示すため、「魔術的他者」(125)と「野蛮な他者」(108)であると見做される。そのような反応を、本発表では異なる国家的、文化的背景を持つ者達へのアメリカ国家による矛盾する態度に立脚するものと捉えたい。矛盾する態度とはここでは、Ali Behdad が *A Forgetful Nation* (2005) で指摘する移民に対する矛盾する態度に由来する。「国家は歓待と敵意、外国人嫌悪と外国人好みとの間を揺れ動く。なぜならアメリカ

合衆国には文化的自己同一性の拮抗する概念的枠組みが存在するからである」(16)。そのような態度が、Pynchonの小説における移民或は外部から到来する他者に向けられることに本論は注目し、体制及び主流なものを切り崩さんとするトリステロの、脅威に満ちた変革の力が持つ意味を検討する。

エディパは「望まれざる外国人」の代表的集団であるトリステロを彼女の国家像に組み込もうと試みる。彼女はトリステロが示す言説、態度、価値観、そして信条が、冷戦下の個人と国家そして抑圧的国家機関との関係を複雑化することを理解する。エディパの構築する国家像の持つ可能性を探求するために、まずは移民に関する法的な定義を検討し、その中で「望まれざる外国人」と「望まれる外国人」という概念から、エディパが生きる20世紀半ばのアメリカの、外国人に対する概念形成の問題に触れたい。そのような概念の検討を行いながら、望まれざる者達が有する脅威に隠された或る種の理想について明らかにする。更にエディパが産出する空想について注目し、その中で「野蛮な他者」であるトリステロの陰謀をどのように扱うのかを分析する。興味の対象は、如何にして彼女が既存の象徴的ネットワークを再編成するか、そしてそのネットワークに生じる虚空に如何にして対処するのかである。虚空の出現によるネットワークの中断が彼女の想像力を広げ、彼女の行動を突き動かす、人種的・文化的他者が居住する都市の人口密集地域における社会的矛盾や、革新的政治思想及び活動に係る倫理的な問題へと誘ってゆく。

第8室 (吉田南総合館北棟3階, 共北34)

司会 波戸岡 景 太

1. 喪失のトラウマを乗り越えて—— *Extremely Loud and Incredibly Close* における復元力

佐賀県立小城高等学校 中 尾 友 美

9・11においてアメリカは、WTCから落下するもの映像が如実に示すように、癒し難いトラウマに囚われることになった。ブッシュ政権はテロ戦争の幕開けを説いたが、War on Terrorとは、その語が示すとおり「恐怖との戦争」に他ならない。9・11を体験した作家のJonathan Safran Foerは、テロルの無差別性に

着目し、2005年刊行のポスト9・11小説 *Extremely Loud and Incredibly Close* において、無差別的に人々を襲うトラウマを描いた。本発表では、9・11やドレスデン爆撃を体験した本作の語り部 Oscar, Grandpa, Grandma の喪失のトラウマを考察するとともに、それらと身をもって対峙した彼らが、いかなる復元力をもってそこから蘇るかについて考察を進めたい。

3人のトラウマ体験には、トラウマ患者特有の症状が見られ、記憶が消去不能のイメージとして心にこびりつく。この無力化により、3人はバランス感覚を失い、さらに孤立の状況により、彼らの脆弱性が前景化される。Judith Hermanによれば、トラウマ記憶には、無時間性と沈黙性が備わっている。無時間性の例として、9・11と類似点があり、喪失の象徴である第六行政区が凍結した描写は、Oscarの凍てついた9・11のトラウマ記憶を表していると言える。「落ちる男」の静止画像にも無時間性が見られる。Roger K. PitmanやScott P. Orrのトラウマ論と、本作に度々出てくる「巨大な穴」という表現に着目すると、無時間的空間であるブラックホールとしてのトラウマが見えてくる。また、トラウマの沈黙性に関わる事柄として、Grandpaの失語症や、それぞれの人物が抱える秘密の問題がある。ここにも、言葉や記憶が全て内に吸い込まれてしまう、ブラックホールとしてのトラウマを見出すことができる。

心理学者のPierre Janetは、トラウマ記憶が語りによって時間軸のある「物語記憶」へと変換されることで、患者は回復すると説く。それには聞き手の獲得が必須だが、たとえばOscarとGrandpaは、互いに鍵と鍵穴の関係であることにより、出会った瞬間にカタルシスが起る。また、9・11で死んだThomasの空の棺桶はトラウマ記憶の象徴でもあろうが、それを掘り起こし、手紙を詰めて弔うことを通してライフストーリーへの過去の記憶の組み込みが可能となる。

以上見てきたような回復を超えて、さらに本作には、引いた分だけ押し戻す、復元力に富んだダイナミズムが窺える。Oscarは科学的思考に囚われ、GrandpaやGrandmaは、二分的思考で全てを分別していた。この思考の凍結により彼は、不可分の曖昧な感情を覚えたとき対処出来ずにいたが、トラウマ体験を経ることにより、固定化した思考から脱し、冒険の見地へ続く扉を開く。それはOscarの、重力に抗えないままの「悲観的発明」から、「落ちる男」を再浮上させる「樂觀的発明」への転向や、旅立ちの場である空港で二項対立的思考から解放されるGrandpaとGrandmaの姿に明らかである。Oscarのクリエイティブな視覚表象も取り入れ、彼独特の言語表現をタイトルとして紡がれた本作のテキストそれ自体が、彼の想像／創造的な復元力のなによりの証左となっているのである。

2. “there isn’t going to be any room to bury anyone”: Chasing Death’s Memory in *Extremely Loud and Incredibly Close*

北九州市立大学 Wayne E. Arnold

Jonathan Safran Foer’s 2005 novel, *Extremely Loud and Incredibly Close*, approaches the emotional complexities of death and mourning within the New York City metropolis in wake of the 9/11 terrorist attacks. Set after the death of young Oskar Schell’s father in the World Trade Center, the narrative follows Oskar on his quests—for an unknown lock to which he holds the key, a forgotten sixth borough, and an understanding of loss. Situated in the confines of the city, the novel is an urban exploration for self identity while faced with the unrecoverable passing of both human life and the iconic image of the city: the Twin Towers. Due to the absence of a physical body, Oskar perceives his father’s gravesite as a meaningless memorial, and he searches the metropolis for an alternative sense of resolution to his mourning. Oskar’s quest represents his cognizance of the ephemeral nature of life; yet, more importantly, I believe Foer’s narrative should be conceived as an analysis of modern man and urban related identity, where the complexity of “place identity” becomes embroiled in the post-9/11 urban fabric. Interspersed throughout the narrative, Foer augments the story with photographs, including the iconic “falling man” image that poignantly silhouettes an imminent death against the cityscape. Oskar blends the falling man into a semblance of his father, as the identity of the person was unknown; in doing so, Oskar is able to place his father’s body at a temporal and identifiable location—although now shattered—within the metropolis, consciously preserving remembrance of his father. Nevertheless, Oskar’s questing dampens the recollections of his father and shifts his focus onto bringing meaning to his father’s memorial, both in the time and space of the city. Seeking his closure, Oskar takes to the streets of New York City, becoming a child *flâneur*, examining the surrounding environment, while struggling to comprehend the complexities of the oppidan and the transforming conceptions surrounding both existing in

and passing from an urban life. With the backdrop of the heinous events and haunting aftermath of the terrorist attacks, I utilize Foer’s novel to argue that, in the post-9/11 world, the influence of megalopolitan architectonics have led to an altering in our cognitive understanding of the metropolis, demonstrating the continuing shift in the psychological mindset for coping with both urban life and death.

司会 山口 和彦

3. 時を編む——*The Body Artist* における「囁^{さえず}り」の詩学

大阪大学(院) 平川 和

The Possibility of Fiction (2006) において Peter Boxall は, Don DeLillo のノヴェラ *The Body Artist* (2001) を「喪の時間, 物語性を喪失した空白の時間に生じる小説」として位置づける。というのも, 主人公 Lauren は物語冒頭で夫を自殺で亡くすため, その瞬間から夫婦の時間が永遠に停止し, 2人の物語が破綻してしまうのである。Lauren にとっては, 「時間こそが人間の存在を定義するもの」であり, また「時間だけが意義を持つ唯一の物語であり, 死を目の当たりにしてもそこから脱却できるようにするもの」であった。それゆえ彼女は, 計画を立て, 時間を組織化して生きていくことで夫の死を乗り越えようとする。しかし, 夫の亡き後, Lauren の前に突如として現れた Mr. Tuttle と呼ばれる謎の男は, 彼女を全く別種の時間——過去と未来が錯綜し, ただ圧倒的に存在するだけの時間——へと誘っていく。

このような物語性を喪失した時間を生きる Tuttle は, 全く別種の時間の様態へとみ出し, 染み込んでいく「人間の存在を侵犯した」存在として描かれる。もとより自閉的で失語症気味の Tuttle だが, 彼の発話は一切の文脈を欠いているため, Lauren と Tuttle の間には意志疎通のためのコミュニケーションが成り立たない。しかしながら, 意味を欠いたまま音声のみが浮遊する Tuttle の声は, 物語の背景に度々登場する小鳥の「囁^{さえず}り」に重ね合わせられ, Lauren の耳には「歌声」のようにさえずる。また, シニフィエを欠いたシニフィアンの戯れという点で, Tuttle の囁^{さえず}りには, DeLillo が一貫してその神秘性に魅せられている「幼児の喃語^{なんご}」に通底するものもあるだろう。David Cowart が *The Physics of Language* (2002) において喃語が「ある世界から別世界への架橋」を可能にする

ものだと論じているとおり、Tuttleの囀りもまた、Laurenをある現実から別の現実へと導くものであることに疑いはない。

本発表では、茫漠とした時間の海原を浮遊するTuttleの言葉を水先案内人として、Laurenが、物語性を持った時間相から物語性を欠いた時間相へといかに越境していくかを、「囀り」という視点から考察したうえで、この超時間的体験が*Body Time*という身体芸術にいかに編み込まれていったのか、Gilles Deleuzeを援用しつつ分析を試みる。このパフォーマンスにおいてLaurenは、能を舞う日本人女性から、Tuttleを想起させる失語症の男へと変幻自在に自身の身体を変化させ、Tuttleよろしく、トランス・ジェンダー的に身体を別のレベルへと飛躍させる。さらにLauren曰く、このパフォーマンスのコンセプトは「時間を別の形で捉えること」であり、パフォーマンスを通して彼女は、時間を止めたり、引き延ばしたり、開いて曝け出したりと、自由自在に時間を操る。Laurenの親友Marieraは、彼女の超時間的身体パフォーマンスについての劇評において、「自分たちが何者であるか、リハーサルをしていないときに、われわれはいったい何者なのか」を問うアートだと分析する。その謂いに倣って言うならば、人間存在を定義してきた時間を敢えて脱臼させようとするLaurenの*Body Time*は、「時間が人間存在を定義しないときに、人間とはいったい何者なのか」を問うリハーサルとなるだろう。

4. DeLillo 作品における女性と芸術

大阪大学(院) 江 藤 知 美

Don DeLilloの小説の特徴の一つとして、絵画や写真、映画やパフォーマンスアートといった芸術が、作品のテーマとの関係においてしばしば重要な意味を担われている。例えば、*Mao II* (1991)においてAndy Warholのマオシリーズが作品の中核を貫く意匠として不可欠な機能を果たしている。*Underworld* (1997)のプロローグは、表題のとおりPeter Bruegelの*The Triumph of Death*が至福感の溢れる球場に核の不安を呼び起こす陰影を投げ、老いのテーマとしてJames McNeill Whistlerの母の肖像への言及が見られる。また*Cosmopolis* (2003)では、Mark Rothkoの絵画購入の話が主人公の体現する「崇高」とかかわり、*Falling Man* (2007)では、Giorgio Morandiの絵画についての議論が、9.11を射程に入れ展開された。

本発表で注目したいのは、小説内の芸術には何らかのかたちで女性関わっていることが多いことだ。

*Mao II*で写真に関わるのは女性カメラマンのBrita、*Underworld*ではKlaraが砂漠において廃棄された爆撃機にペイントを施す。もっとも、DeLillo作品において芸術と女性という観点から注目すべき作品は*The Body Artist* (2001)である。物語は主人公Laurenが配偶者の自殺を経てパフォーマンスアートを上演し、インタビューを受けた後で終わる。第一章においては彼女の女性らしさが顕著なのに対し、第六章で明らかなのは、*Body Time*という芸術作品では彼女が日本人の老婦人を演じ、最終的には失語症の男性へと変化する。つまり芸術においてLaurenという人物が、性別や年齢という点で変容を遂げていることが分かる。

このような*The Body Artist*に見出される芸術と女性の深い関わりは、*Mao II*のBritaや*Underworld*のKlaraにその片鱗を見つけられる。Britaが選定した被写体は主人公BillとテロリストのRashidの二人であるが、彼らの思惑を分断するように彼女はカメラのシャッターを切る。彼女がファインダー越しに見つめるのは、肩書がそぎ落とされ彼女の作品にすぎない存在へと変化した男性達だ。また、男性性と結びつけて考えられる爆撃機を芸術の枠組みにはめ込もうとするKlaraの行為は、芸術による性差の超越を試みていると捉えられる。さらに彼女がランドスケープアートと主張し、あえて砂漠を中心に据え、“The desert bears the visible signs of all the detonations we set off.”という彼女の見解を加えれば、自然の変化でさえ彼女の作品内に留まることが読み取れる。

本発表では、*Mao II*, *Underworld*, *The Body Artist*のDeLillo文学三作品において女性が芸術といかにかわり、それが物語においてどのような役割を果たしているか、彼の文学における芸術表象の持つ意味をジェンダーの視点から明らかにしたい。

第9室（吉田南総合館北棟3階，共北35）

1. セッションなし

司会 竹谷悦子

2. 敵対する〈他者〉のいない世界

—*The Temple of My Familiar*
と *Now Is the Time to Open Your Heart* で希求される帝国主義・植
民地主義を超えた未来

広島大学（院）光森幸子

Alice Walker の *The Temple of My Familiar* (1989, 以下 MF) と *Now Is the Time to Open Your Heart* (2004, 以下 YH) には、どちらにも、1980年代以降のカリフォルニア州に生きる黒人中流階級の主人公達が、喪失した自己を回復していく姿が描かれている。公民権運動によって法律上は「人種差別のない社会」になり、大学教育を受け、社会的な地位も上がり、経済的にも安定する黒人が増え始めた。Walker は、白人主流社会に同化し、中産階級化していくこうした新しい黒人を、時代の特徴として捉えると同時に、彼らが白人男性中心の価値観に飲み込まれ、黒人のアイデンティティを見失っていく様子に危機感を抱いている。

特に、職場での不満や怒りを家庭の中で妻を支配することで解消しようとする男性主人公や、夫のそうした父権的な価値観に振り回され、自己を破滅させる女性主人公を描く MF には、両親や祖先とのつながりを失った、新しい中流黒人の孤独が顕著に現れている。したがって従来の MF 研究では、黒人主人公達が抱えるこうした問題を、主に、彼らが黒人の歴史と切り離されている点に着目して論じてきた。たとえば Iken-Dieke は、彼らが自己を回復するための歴史的経験の重要性を指摘しているし、ポストモダンの観点から読む Bonnie Braendlin も、MF の断片的な語りの中に、絶えず歴史とのつながりを奪われている主人公達の姿を見出している。実際、主人公達は、両親や先祖の努力や抵抗の歴史を知ることによって、初めて自身の問題に向き合う力を獲得できる。

さらに、YH では、作品の視点は中流黒人達の窮状を歴史との関わりで認識することから、次世代のため

に彼らが果たすべき役割を地球規模で示すことへ移行していく。そうした YH の内容の広がりには MF からの発展が明らかに見られるが、まだ研究も少なく、両作品の比較において論じられてもいない。

そこで本発表では、MF から YH へのテキストの発展性を考慮しつつ、両作品の登場人物の成長を精査する。そして、黒人のアイデンティティは黒人の歴史に深く関わる帝国主義や植民地主義と切り離せないことを確認したうえで、それらの影響を Walker が地球を俯瞰して描く理由を突き詰めてみたい。というのも、主人公達が残存するそれらの抑圧的な力の実態を見据えるとき、一般的な、黒人のアイデンティティの回復という枠を超える大きな変化が彼らに現れるだけではない。YH には MF で示された黒人のアイデンティティを発展させ、W. E. B. Du Bois が提起したアメリカ黒人の〈二重意識〉を根本的に問い直すような、新しい視点がうかがえるからである。

司会 西本あづさ

3. 衣服から読む *Song of Solomon*

九州大学（院）河野世莉奈

Toni Morrison 第三作 *Song of Solomon* (1977) は Milkman というあだ名をつけられた Macon Dead III という黒人少年が主人公の物語である。この Milkman の自己の探求と祖先のルーツを探る旅が主な物語の筋ではあるものの、第一作・第二作と同様 Morrison が黒人女性の世界を色濃く描き出していることは注目すべき点である。ある者は暮らしぶりや風貌から男女の区別を覆す可能性のある女性として描き出され、ある者は男からの愛を求めて半狂乱になり、病気になり死んでいく。こういった彼女たちから読み取れるのは、男性から自立した姿あるいは男性による支配を受け入れていく姿である。そして何よりも興味深いのはそのような彼女たちの傾向が、衣服に対する関心と呼応している点である。本発表では、彼女たちが身に纏う物に着目し、それが彼女たちの男性からの自立/男性への依存とどのような関わりを持っているのかを明らかにすることを目的とする。

Morrison 研究において、女性登場人物が自由を求める姿について論じたものは多く見られ、彼女たちが身に付けているものについての言及もなされるものの、服装を中心に据えて女性の自立と結び付けた論はほとんどない。サラ・ルーカスの言葉を借りれば、「どんな服を着るかは、アイデンティティ（自分らしさ）

に関係」し、服飾評論家である落合正勝氏も言うように「『服装』により自己の確認を試み、それを客観である他者の眼に伝達し、『服装』を通して自己のルーツを表現」するために人は衣服を纏う。Morrison 作品における女性登場人物が一貫して自由の探求を課題としていることを踏まえれば、本作品において彼女たちがどのような服を着て、どのように自己を表現しているのかは大変重要なテーマであると言えるだろう。

本作品において、最も力強く影響力の大きい女性登場人物として描かれるのは、Milkman の叔母 Pilate である。彼女の衣服に対する無頓着さは彼女の幼少時代の苦境が影響したものであるが、そのことは彼女の欠点とならず、むしろ男性の支配を許さない「強い」女性の象徴となっている。しかし、一方で、彼女の孫娘 Hagar は彼女とは対照的な生き方をする。血縁関係にある Milkman からの愛を執拗に求め続け、なぜ彼からの愛が獲得できないのか思い悩み半狂乱に陥り、新しく服や靴を買い漁る。帰宅後に雨や泥で汚れたワンピースに身を包み化粧をし精神状態を安定させる彼女は、男性のために自らを必死で飾る、まさに男性に依存する女性の姿であると言えよう。彼女たちだけではなく他の女性登場人物においても、身に纏っている衣服と人間性は深く関わっている。以上のように、女性登場人物が身に纏う衣服に焦点を当て、Morrison が本作品において女性たちの男性との関わり方をどのように描きこもうとしたのかを論じたい。

4. *Beloved* における所有する「者」とされる「物」

西南学院大学 銅 堂 恵美子

奴隷制度の最も肝心な条件は、奴隷が所有可能な「物」である事であったという Thomas D. Morris の指摘からも明らかなように、所有の概念は奴隷制度においてきわめて重要な概念であった。奴隷制度を描いた *Beloved* においても、所有の問題は散在している。Paul D が唯一「所有」する事が出来たのは、白人の手の届かない空の「小さな星」であったし、性的虐待を受けながら年期奉公として働く Amy Denver が自由の身になって初めて考えた事はベルベットの「所有」である。また Sethe の子殺しは、子どもの命を支配、「所有」した結果と考える事も出来る。そして当然ながら黒人の身体を「物」と定義し「所有」する白人主人と、身体を「物」と定義され、人格を破壊されトラウマを与えられた黒人奴隷たちの苦しみ描かれている。本発表では、奴隷制度の基盤となる所有の問題に着目し、John Locke や Cheryl Harris の所有概念に論

及しながら、白人と黒人の間に引かれた所有を巡る境界線について検証したい。

Beloved において、黒人奴隷が奴隷制度から解放され、自己の身体の「所有権を主張する」事の重要性は Doreen Fowler によって指摘されているが、この「所有」の問題に注目した研究はあまりみられないように思われる。*Beloved* のアイデンティティやアフリカ系アメリカ人の文化的要素について論じた研究、歴史表象やナラティブ、記憶とトラウマに関する研究などの従来盛んに行われてきた議論とは別に、所有という観点から論じているのは Trudier Harris であるが、Harris は所有と交換を特徴とする奴隷経済に着目し、多用される貨幣のイメージから、身体的には自由になった黒人たちが精神的には未だ奴隷制度に縛られているという、黒人奴隷の否定的な姿を論じているのみである。そこで本発表では、人間であるにも関わらず物と定義された奴隷の複雑で両義的立場に注目することで、奴隷が「物」であるという定義を前提とした奴隷制度の所有概念の矛盾を *Beloved* が描いている事を検討してみたい。

所有概念の最も有力なものの一つは労働と所有を結びつけた John Locke の所有論であるが、当人が労働を加えて生産したものはその当人に属するとした Locke の論理に反し、*Beloved* において奴隷の労働は全て白人主人に搾取される。この労働の搾取は、黒人を人間ではなく「所有物」と定義し、法制化することで正当化されるが、そもそも人間が物であるという定義は様々な矛盾を孕む。Cheryl Harris は、人間であると同時に所有物であるという奴隷の複雑な身分が、法により何度も定義変更され、その境界線が強制的に明示されてきた事を論じ、この定義の不安定性を明示している。*Beloved* においても、Schoolteacher は、白人こそが定義する者（“the definers”）であると唱え、法を重んじ、「法に反する」Mr. Garner のやり方を否定して奴隷たちを再教育するが、そこで彼は、ペンとノートを持ち、奴隷の立場を定義付け、明文化する事によって白人との区別を強化しようと試みる。しかしながら、黒人を所有物として完全に支配する事は、Sixo と Thirty-Mile Woman の子どもが白人所有者の支配から逃れた事に暗示されているように不可能であり、いくら奴隷を所有物と明文化し法制化しようとも、その定義は常に不完全であり、しばしば破綻する。

本発表では、所有という観点から *Beloved* を読む事で、奴隷のおかれた複雑な立場を検証し、白人と黒人の間に引かれた人種の境界線の不安定性について考察すると同時に、Harris が子どもの命を「所有」し、奴隷制度の悪を再現したと論じる Sethe の子殺しを再検討し、「白人の法を破る」行為としての読みの可能性を探ってみたい。

第10室（吉田南総合館北棟3階，共北36）

司会 藤本雅樹

1. Robert Frost の *New Hampshire* における田舎のイメージと男性性

立教大学（院）朝倉 さやか

ニューイングランド詩人としての Robert Frost の地域性はこれまで様々な観点から論じられてきた。その中で Maria Farland や Donald Sheehy は、都市とは反対に田舎は衰退や退化の場であり住民は劣った存在であると論じた当時の社会学に対する抵抗として、Frost の作品を説明する。しかし一方で、都市が失った美德や崇高、男性性を保持する場所として、人々が田舎を理想化してきたことを、Priscilla Paton や Michael Kimmel は指摘している。そのため田舎に対する偏見を修正しようとする Frost の試みは、田舎の現実に目を向けることによって、そうした理想化されたイメージの修正をも迫ることになったのではない。そこで本発表では第四詩集 *New Hampshire* (1923) の表題詩 “New Hampshire” を他作品と合わせて考察し、マサチューセッツ州や大都市ニューヨークがニューハンプシャー州に押し付けるイメージを語り手が無効化することで、皮肉にもそこで暮らした語り手の男性性の不安が浮かび上がる様子を明らかにする。

出版当時、表題詩以外の作品は、“New Hampshire” の「注釈」として配置されていた。これは *The Waste Land* (1922) のパロディと考えられており、詩集自体が都市に対する皮肉をはらんでいたと思われる。その中で、Frost 同様ニューハンプシャー州に農場を持っていたという表題詩の語り手は、商業主義に染まっていないこの州を「合衆国でもっともすばらしい州の一つ」と高く評価する。ところが「マサチューセッツの名誉に満ちた詩人」はニューハンプシャー州の “lofty” な山に対して、その人々は数が少なく知性においても平凡であると言う。そこで語り手は、山が「実際よりも2倍の高さ」で地図に示されており、都市の人間が思っている程 “lofty” ではないと指摘することで、理想化された田舎のイメージを崩す。また語り手は、都市の人間が「ドストエフスキー」の「小説」に登場するような苦境に立つ住人を期待していると看破すると、人々の平凡な生活を肯定することによって都市の人間が求めるイメージを拒絶する。

しかし山の高さは力強さや荒々しさと結びつけられ

ているため、山が「十分に高くはない」という事実が語り手にとってニューハンプシャー州の「唯一の欠点」となり、語り手自身の男性性の問題となって浮かび上がる。語り手は自分の代わりに山々を「荒々しく」「高くしたい」と考える。だが「ニューヨークの気取り屋」との「新しい似非男根崇拜主義」についての議論の中で、「淑女ぶった」女のような人間になるか、開拓地にいるような「反吐を吐く」荒々しい人間になるかという選択を迫られた語り手は、どちらでもない「ニューハンプシャーの農夫」を選ぶと言う。こうして語り手は都市の人間が押し付ける「狭い選択肢」を拒絶するのだが、引き換えに不十分な男らしさという「欠点」を受け入れることになる。Frost は田舎暮らしの中で男性性の不安を抱えながら、そのような不安を感じさせる場所としてニューハンプシャー州を描き出したのである。

2. 「形式は機能に従う」——Carl Sandburg の *Chicago Poems* における高層ビルの表象

東京大学（院）坪野圭介

本発表では、シカゴの都市風景や労働者の生活を描いた Carl Sandburg, *Chicago Poems* (1916) を、当時最新の建築様式であった鉄筋高層ビルの描写に着目し、同時代の文学者や知識人たちのビルの取り上げ方と比較しながら検討する。「形式は機能に従う」という言葉は、シカゴの初期摩天楼建築の多くを手がけた建築家 Louis Sullivan が打ち出し、建築におけるモダニズムにおいて共有された思考形式だが、Sandburg もまた同種の思想を高層ビルのうちに発見し、急速に発展を遂げた都市自体のメカニズムにまでその思想を拡張させていたのではないだろうか。*Chicago Poems* は、そうした考え方の詩的实践だったといえるのではないか。現在ではあらためて積極的な評価を与えられる機会の少ない Sandburg だが、その詩編において当時のアメリカ大都市の「新しさ」を的確に捉え、かつ独自の詩的表現へと昇華させていたことを、通時的なビル表象の変化、20世紀初頭の都市文化および建築文化の状況、詩中での擬人法が持つ意味の考察を踏まえて再検討してみたい。

1880年代以降、シカゴやニューヨークに “skyscraper” と呼ばれる高層ビルが登場すると、Henry James や Edith Wharton をはじめとする当時の文学者や知識人たちはこぞって批判を浴びせた。実用性を重視し、装飾性を極力削ぎ落としたこの新たな建築様

式は、ヨーロッパ建築に比べて「醜い」ことから、それが資本主義社会を即物的に象徴する建物であったことから反発を受けた。文学作品中でも、主に Frank Norris や Upton Sinclair ら自然主義作家の小説に高層ビルが立ち並ぶ都市風景が描かれたが、それらの描写もまた、基本的には産業社会・資本主義社会への批判を込めた表象であった。一方、批評家・詩人の Sadakichi Hartman は、“To the Flat Iron” (1904) の中で “future ages will proclaim / your beauty, boldly, / without shame” と記し、高層ビル建築を本格的に主題化して限定つきの評価を与えた。高層ビルの美しさを「恥じることなく褒め称える」日が来るだろうという Hartman の予言は、10年余りの月日を経たのちに Sandburg による摩天楼の全面的な肯定において現実化することになる。

Chicago Poems の最後の一編 “Skyscraper” における高層ビル表象が他の作家・知識人のものと大きく隔たっていたのは、そこに建物の外観や建築様式に対する審美的な判断も、資本主義社会の「問題」と関連付ける描写も含まれていない点だった。代わりに描かれているのは、ビルの内部／外部からの人々の流れ、ビルを建設した人々やビルで働く人々の情景、そしてビルの内部構造がそこで行われる作業や労働を最適化させる様子である。そうしたきわめて具体的な人々の流れと働きの集積によって、ビル全体が魂を持った存在として描き出される。この最後の一編を踏まえて詩集を遡行していくと、最初の一編 “Chicago” にも同様に、都市という規模における人々の流れと働きの、活気に満ちた一人の「人間」として描かれていることが読み取れる。すなわち、Sandburg が空間の擬人化を通して主題化しているのは、人々を労働させ循環させるという具体的な機能の集積としての摩天楼であり、さらに巨大なスケールで同じ機能を果たしている現代都市シカゴである。建築様式や装飾性を基に設計を行うのではなく、必要な機能を満たすことに注力すれば最適な形式が得られるはずだという、モダニズム建築が見出した美意識を、Sandburg もまた、摩天楼／都市を機能主義的に捉える詩的ビジョンの裡に共有している。伝統的詩形や詩的言語を用いず、素朴な労働者の言葉遣いによって都市生活の輪郭を浮かび上がらせる詩集全体の描き方も、摩天楼建築と同様の原理に則って、作中のシカゴを「機能」させるために必然的に要請された「形式」なのだといえるだろう。

司会 渡部 桃子

3. Sylvia Plath の詩における “blood sisterhood”

神戸市外国語大学(院) 井上 詩歩子

自己をあらゆる束縛から解放したいという衝動は、Sylvia Plath の詩全体に見られるテーマである。なかでも女性が置かれた生物学的状況、すなわち肉体的な意味において女性であることが、彼女を最も逃れがたいかたちで束縛していたことが数篇の詩から伺える。それらの詩において、生物学的意味での女性性からの脱出を試みる語り手がたびたび「赤」のモチーフに敏感に反応している点が興味深い。本発表では “Blackberrying” に示される “blood sisterhood” という言葉を手がかりに、語り手と「赤」のモチーフを結び目に注目する。

女性である自己の肉体に対する違和感は、出産・流産といった女性に特有の経験を通して Plath のなかでそれまで以上に強くなったようだ。それらの経験のあとに書かれた詩は、彼女が女性性に対して抱く曖昧な、非理性的とも言える感情を浮かび上がらせている。

“Tulips” や “Blackberrying” において女性であることに思いをめぐらす語り手は、チューリップの花弁やクロイチゴの果汁が血に似たその赤い色によって彼女に出産・流産の経験を思い起こさせるのを嫌がるが、それらと自分との間に「赤」による確かな結びつき、すなわち “blood sisterhood” があることを強く意識する。この意味で語り手は女性であるという逃れ得ない事実を十分にわかっている。しかしその事実を甘受することが出来ない語り手は、彼女の “blood sisters” である「赤」のモチーフに歩み寄ったかと思うと、直ちに嫌悪を露にし、それを拒絶する。“blood sisterhood” に向けられる語り手のアンビヴァレントな態度は、詩人の内面に潜む、なかなか言葉で表しにくい対立する思いを反映しているように思われる。

この “blood sisterhood” を描く際、Plath は血を伴う経験の苦しみを共有する女性の、生物学的状況下における連帯のようなものを念頭に置いていたと思われるが、この連帯が彼女を慰めることはなかった。

“Sisterhood” は1960年代以降アメリカを中心として盛んになったフェミニズム運動のスローガンになり、そこでは父権社会に対抗するための女性の連帯の必要性が強うたわれたが、Plath の態度はこのような運動家たちのものとは一線を画している。社会における女性の地位向上を目指す運動家たちが連帯を強め、大きな社会的な声を獲得する一方で、Plath はただ一人

孤独に、女性が置かれたより根本的な肉体的状況と格闘した。この点を踏まえて、フェミニストの提唱する“sisterhood”に対する懐疑と、それ故に彼女が抱え込んだ孤独感を、“blood sisterhood”に読み取ることも可能だろう。

以上のように、“blood sisterhood”という独特の性質を持つ絆は、Plathの女性性に対する複雑な思いを読み解く上で重要な概念であるように思われる。絶対的な束縛だとわかっているにもかかわらず逃れたいという無茶な願望を捨てることができない詩人の葛藤が表現されているいくつかの詩を、“blood sisterhood”に焦点を当てて分析し、女性性に対する言語化し難い思いがいかに表現されているか探りたい。

4. “Lady Lazarus”と“Daddy”における戦争のイメージ——Sylvia Plathの文化的・歴史的な文脈を通じた反響と逸脱の効果生成戦略

呉工業高等専門学校 上 杉 裕 子

Sylvia Plathの第二次世界大戦と政治的トラウマを表象するテキストは、歴史的・文化的なできごとが糸となって針で貫き通されているようだ。本発表は、Plathの最も力強い詩の中でも特に“Lady Lazarus”と“Daddy”に焦点を当てながら、Plathがいかに歴史的・文化的な文脈からインパクトのある語彙、表現を創作の中に針で通る糸のようにはりめぐらせ、いかなる詩の効果を生成しているかを明らかにすることを目標としている。

これら二つの詩に焦点を当て、戦争のイメージを分析していく過程で、これらの詩に靈感を与えた第二次世界大戦のテキストに、Plathの詩は反響しながらもそれらを逸脱していくことが明らかになった。

反響しながらも逸脱するテキストが生み出されるのはなぜなのか、その答えを探るために、彼女の内なる世界から引き出された創作の源となるものと戦争のディスコースの間の関係を分析し、彼女が用いた文化的・歴史的な文脈を通じた効果生成のための戦略を紐解いていく。

本発表の方法論を以下に述べる。本発表は文化的・歴史的な文脈の理解を基盤として発展させるものであるため、まずはPlathが生きた歴史をアメリカのみならず世界的に振り返るという基本的姿勢が求められる。彼女が生きた1932年から1963年の31年間の間には、第二次世界大戦が勃発し、ナチスドイツが台頭し、中国・

ソ連・イギリス・フランスなどで女性参政権が認められた。第2次世界大戦後の国際政治では、国際連合の成立、インド独立、ドイツ民主女性連盟成立、国際世界人権宣言、ケンブリッジ大学の女性への学位開放、東ドイツ建国、朝鮮戦争勃発など、世界の歴史が激動した。彼女が生きた時代における世界の歴史を照合させながら、そんな時代の中、彼女がいかに歴史的問題、社会的問題に関心を持ち、疑問視し、憤り、自分の意見を持っていたかを考察する。*The Journal of Sylvia Plath* (1982) や *Letters Home by Sylvia Plath* (1975) を題材に、彼女の内なる世界がいかに政治的出来事が混沌とした渦をもたらし、彼女自身の言葉で辿る。その上で、彼女の内的世界をさらに深く理解するため、Freud, Alvarez, Kristevaの理論を用い、分析を行う。以上の基盤に立ちながら、Plathの詩におけるホロコーストや戦争のイメージがいかに発展させられ、拷問を描写するときその暴力性が用いられているかを検証する。

分析の結果、父との死別は、彼女に終生消えない強迫観念をもたらした。詩の中にも表象されている重要な要素でありながらも、この幼少時代の心の乱れは、相互に保障された破壊を伴いながら、冷戦の存在論的な不安定さに共鳴していたということが明らかとなった。自殺の直前には核戦争への脅威を感じており、「^{シヴァ}吊いの劇場」とも呼ばれるものを引き起こしたのは、他でもなく彼女の恐怖から生まれる過去と未来の非生産性であった。この劇場を設定したのは、閉じ込められた幼少時代の苦しみに終止符を打つためだけでなく、第二次世界大戦、ホロコースト、そして拷問の場面という悲惨な歴史を統合させる迫害者と犠牲者の像を創り出すためであった。ここに反響と逸脱の効果生成戦略を読み取ることが可能であり、彼女の創作における文化的・歴史的な文脈に糸を通して針が浮き彫りになるのである。

第11室 (吉田南総合館北棟3階, 共北37)

司会 阿部公彦

1. Comics' Cosmic Poetry: Psychedelics, Chaos and the Poetics of Comics in Grant Morrison's *The Invisibles*

関西外国語大学 Ian Stuart Garlington

Grant Morrison is one of the most prolific and well-known superhero comic writers of all time. He wrote his magnum opus, *The Invisibles*, as a fifty-nine-issue comic book series that was published under DC comics's Vertigo label from 1994 to 2000. Several artists—most notably, Steve Yeowell, Jill Thompson, Chris Weston, Phil Jiminez, and Frank Quitely—produced the artwork with various combinations of inkers, colorists and letterers.

The plot of *The Invisibles* loosely centers on a group of anarchist, time-traveling, psychic agents of the Invisible College in their Manichean struggle with the Outer Church—the forces of death and order that are trying to expand their control over the entire physical universe. Throughout the heroes' adventures they are each contacted by a higher-dimensional being called Barbelith, a large red orb, much like the monoliths of Arthur C. Clarke's *2001*. Barbelith transmits higher-dimensional knowledge to the characters, which ultimately leads to both the end of the struggle with the Outer Church and humanity's entry into a fifth-dimensional realm of timeless, unified consciousness, referred to as the "Supercontext."

In this presentation I attempt to demonstrate that the peculiar combination of content and form in *The Invisibles* brings to the surface the key processes for the production of meaning in the comics medium. More specifically, the intertwined subjects of psychedelic drugs, higher dimensions and time travel, presented in comic books that reflect the rigidity of the publishing process for the serialized mainstream superhero genre, result in an explicit image of time that is unique to the comics medium.

This is first argued by identifying the critical blind

spot that has emerged regarding Morrison's work in relation to the use of psychedelics, as well as looking at the function of psychedelics within the storyline as it relates to ontological uncertainty and an exterior view of time. Next, Morrison's psychedelic utopia is viewed in the context of Deleuze and Guattari's writings on the role of chaos in the process of perception and how this serves as the most appropriate model for semantic production in comics. Finally, these points are considered in relation to Morrison's descriptions of comics as poetry, which is composed of a rhythm that can be observed through examples of the clash between the limitations on physical page space as the result of publication restrictions and content that strives to include everything under and above the sun—a tendency most prominent among writers who are swayed by psychedelic visions of the totality of the universe.

2. "It's trash": Comic Books and Invalidated Selves in the Poetry of Leslie Scalapino

名桜大学 Meghan Kuckelman

Scattered throughout American poet Leslie Scalapino's writings are references—sentences, clipped phrases, occasionally whole "essays"—to "the comic book." Lines such as "the comic book is the self," "the comic book is calm," and "the comic book is the exact same thing as experience" conflate issues of selfhood and identity with what has until recently been understood as "nothing more than" a mass market pop genre. Scalapino's sense of self is markedly influenced by the Buddhist philosophy of Nāgārjuna, a philosophy which rejects the validity of any sort of self-sustaining entity and instead promotes relational, contingent modes of existence. From this perspective, analyzing Scalapino's self in terms of the relational, serial mode of presentation in the comic book makes sense, and several scholars of Scalapino's work have taken this perspective. What has thus far been neglected in this sort of critical approach to Scalapino's work, however, is a critical engagement with the *comic book itself*. I have argued elsewhere that the general understanding of how readers constitute meaning in comic books helps us to understand

Scalapino's selfhood as an intersubjective exchange of perspectives. In this presentation, I will take a different approach, examining the social history of comic books as a "second-rate medium" mass produced for children, immigrants, and the deviant. In particular, I will argue that an analysis of this aspect of the genre of comic books, when coupled with its close attention to the reader, helps us to understand Scalapino's lines referring to ordered and disordered civilizations, in particular how so-called "ordered" civilizations (powerful ones like the U.S.), refuse to "validate" the experiences of the "disordered" civilizations and by so doing fail to acknowledge the selfhood and identities of the latter's people. Lines like the following, from the *Trilogy*, will occupy my close attention: "the civilization with order having created the clear series of events. / to be a comic book form. It invalidates itself. / It will use itself up as pulp and be regarded as nothing. It is not 'discursive,' 'analytical' 'method'—by in some ways reproducing such and not being that. / If the series is inhibited, cauterized early—on no relations occur between people. / one can't expect to be a bum—according to them." This presentation is part of an on-going project that will open up Scalapino's rather radical poetics of identity and selfhood to a wider audience of readers and scholars. It will also work toward bridging the artificial divide between ways of reading poetry and ways of reading comics.

司会 山 口 均

3. 意味よりも音を重視した表現——

The Waste Land の非西洋的言語

東京外国語大学 (非常勤) 岩 川 倫 子

かつて私は2009年の論文「『荒地』とダダイズム——断片性の考察」(『上智英語文学研究』第34号)において、T. S. Eliotの*The Waste Land* (1922)のコラージュ的手法に注目し、ダダからの影響の可能性を論じた。だがEliotがダダを論じた資料としては、その芸術刷新の試みに関心を示しつつも「歴史感覚」のなさを断じた書評(*Egoist*, 1919)があるのみで、ダダからの直接の影響を証明するにはいたらなかった。それでも、Eliotとダダイズムは、西洋の言語において表現できないものを非西洋的な言語において表現しようとして

いるという共通性があったと考える。

2010年に出版された『〈前衛〉とは何か? 〈後衛〉とは何か?』に掲載された大平具彦の「トリスタン・ツアラとプリミティヴ・アート——前衛を導いた二つの〈未開〉について」において、大平はダダを「それまでヨーロッパの表象システムでは認識しきれなかった知覚の絶対的全体を生きようとした運動」と定義し(88)、またその「言葉から意味を奪い、響きと聴覚的対比によって詩に新しい全体的な感覚をもたらすべく言葉を使用する試み」(「Tristan Tzaraの手紙」, 大平489)に際して、Tzaraは「1906年にウィーンで創刊された『人類学と言語学の国際雑誌』『アントロポス』から」書き取った黒人詩篇により詩的表現を学んでいたと指摘する(489)。そして「ダダなどのアヴァンギャルドがプリミティヴ・アートに衝撃を受けたのは、単にヨーロッパにない原初的感情がそこに宿っていたからなどではなく、その『全感覚的な』表現に接して自らの文化圏の表現形態の限界を悟らざるを得なかったというもっと根本的な背景があったからなのだ」(493)と考察している。もちろん、文化人類学の発展が、ヨーロッパの表現者に、自分たちの表現形態とは異なる表現の可能性をもたらしたことは周知の通りである。

The Waste Land はダダのような極端な意味の排除はしていないが、ダダと同様に、外国語や歌(声明や詠唱に近いそれ)、単音節語の繰り返し、オノマトペなど、意味よりも音を重視した、非西洋的な言語の使用が散見される。Eliotは、西洋文学全般にわたる豊富な引喩と並行して、東洋的な祈りの声や、再生へのステップである死を暗示する骨の鳴る音、J. G. Frazerが*The Golden Bough* (1890)で紹介した共感呪術を思わせる雨音や雷鳴のオノマトペなどの非西洋的言語を取り入れることによって、西洋文明の始源への憧憬と円環的な時間の中での再生への希求を音によっても表現している。本発表は、*The Waste Land*の音声的な特徴についての先行研究を踏まえつつ、改めてこれらの非西洋的言語に焦点を当て、この詩が意味よりも音を重視した表現の可能性を追求していることを明らかにし、またそのような試みがなされた背景を考察したい。

4. 宮沢賢治と T. S. Eliot

明治学院大学 富 山 英 俊

宮沢とEliotは同時代人であり、『春と修羅』中の作品の日付(1922-23)は、*The Waste Land*刊行年(1922)とまさに同時期である。経歴の表層を見れば二人の違

いは大きい、根幹において「宗教」詩人という共通性はある。その二人の詩作品は、その構成の具体的な特徴において顕著な類似を示すと言えるが、その源泉にはやはり両者の宗教性が、ただしその非常に特異な現れ方が、存在するだろう。

詩篇の構成について、まずリズムの面で Eliot の “free verse” は、英詩の伝統的な定型と無縁でなく、それを暗黙の雛形としつつ、そこから離れたたり戻ったりするものだった。宮沢の詩もまた、その言語の韻律の定型、この場合はいわゆる七五調のリズムに基づきつつ、それを拡張するものだった。それは、動き続ける詩句の推進力を支えるが、その勢いの停止の際には安定性を与え、次の動きへの繋がりを確保する。この特徴は、宮沢においても Eliot においても、構成されたことばの楽節としての詩作品の実現を助けた。

そうした構成においては多彩な要素が出現し、異質なもの・他なるものとの多声的な対話も生じるが、そこには「宗教的」と言ってよい次元の出来事も入り込む。Eliot においてそれは、1927年にキリスト者の立場を確立した以降の諸作品に認められるはずだ、と想定されるかもしれないが、むしろそれ以前の *The Waste Land* に至る諸篇に、ただし反語的に歪められ転位された形で、より鮮烈に感知されるかもしれない。他方、宮沢においては、たとえばよく知られた妹の追悼詩のうちにも、導入されることばがある及び難い、ほとんど「宗教的」なものとして機能する、といった事態が生じる。それらは、両者の詩を、一人称の主観性の叙情詩から離脱させる。(ただしその宗教性は、詩作品の内外で社会や政治の文脈に接続されれば、もちろん種々の問題を包含する。Eliot には、かれが構想する宗教的に統合された等質的社会はたとえばユダヤ人をどう扱うのか、という周知の問題がある。宮沢の場合それは、かれが八紘一字の造語を行った田中智学の国柱会の熱心な会員であった、という事実である。)

詩作品の音楽的構成に戻れば、*The Waste Land* の一つの特徴は、詩節の交響曲的構成であると言えるが、宮沢の妹への挽歌群、とりわけ「青森挽歌」は、妹の死後の行方を探りつつ、やはり交響曲的と言ってよいやり方で、飛躍と非連続を孕むことばの楽節を紡ぎ続ける。そして両者の終盤は、三つの「お告げ」の声の侵入と、それへの必死の応答から成る。その、直接の影響関係はありえない類似についても、考えてみたい。

第12室 (吉田南総合館北棟3階, 共北38)

司会 外岡尚美

1. クイア劇としての *A Streetcar Named Desire* ——異性愛者

Blanche の表象する同性愛的欲望

大阪大学(院) 村上陽香

Tennessee Williams の作品には同性愛者が故人としてストーリー中で言及されるものが複数存在している。*Cat on a Hot Tin Roof* (1955) や *Suddenly Last Summer* (1957) では同性愛者の存在や彼らの死に纏わる騒動自体がストーリーの根幹を担い、Williams が彼らを舞台上に登場させることなくテーマとして扱ったことが分かる。その一方で *A Streetcar Named Desire* (1947) では、Blanche の亡き夫 Allan の同性愛はストーリーの表面的な流れには大きく影響せず、実際に映画版ではプロダクション・コードによって同性愛要素が完全に排除されている。それでも本戯曲がクイア劇として解釈可能なのは、Blanche の破滅的な運命に Allan の存在が多分に影響を与えているからである。作中、繰り返し Varsouviana Polka が流れるが、これは Allan の自殺時に流れていた音楽である。同性愛行為を軽蔑された Allan の死を何度も反復する本戯曲は、一見同性愛と結びつかないストーリーにも関わらず、同性愛者の亡霊によって支配されているのである。

Blanche は南部の邸宅 Belle Reve で育ったが、一族の没落とともに性的に奔放な生活を送るようになった。彼女はそれでも清純を装うが、Stanley によって好色な本性を暴かれレイプされた結果、精神崩壊してしまう。上品だった彼女が娼婦まがいの生活を送るようになったきっかけは、若い頃に愛する夫 Allan の同性愛行為を目撃し、それを軽蔑したことで彼に自殺されてしまったことである。南部の伝統的異性愛家父長制の下で育った Blanche にとって同性愛は受け入れられるものではなく、Allan に理解を示すことなく拒絶してしまったのだ。皮肉にも、彼女も Stanley に心の内を理解されることなく破壊されてしまう立場になり、Allan が当時抱いていた悲痛を理解するようになる。繰り返し流れる Varsouviana Polka はかつて不寛容であった Blanche の自責の念も、彼女が理解を得られずかつての Allan と同じ立場へ落ちたことも象徴するのだ。

Blanche は、実際の性的経験の多さにも関わらず、自らの処女性を強調している。それが Mitch を結婚へと誘い込むための策略であったことは否定できないが、彼女が“Never inside, I've never lied in my heart...”と言っているように、彼女の中では決して偽りの姿ではないのだろう。かつての淑女らしい理想的な女性像を捨てることも出来ず、かといって今更純潔に戻ることも出来ない Blanche の多面性は本戯曲の魅力の一つである。世間が提示する「あるべき姿」への執着とそこからの乖離、そして周縁化されてしまった者に対する無理解が、本人も同性愛者であった Williams の作品の多くから窺える。Williams が“I am Blanche DuBois”と言ったことは有名だが、それは彼女の不安定な性格や男好きだけを指したのではないだろう。John M. Clum が *Acting Gay* の中で“Blanche DuBois is in many ways the quintessential gay character in American drama”と指摘するように、Williams は異性愛者である Blanche に同性愛者の苦悩を重ねて描いていると考えられる。

発表では戯曲タイトルにも含まれる“desire”に焦点を当てる。Blanche の抱く抗い難い肉体的欲望については多く言及されているが、今回は彼女の心理的欲望に注目する。Allan を今でも愛する様子を見せ、自らの処女性を訴えてやまない Blanche が“reality”ではなく“magic”の世界で抱いていた欲望、理解の渴望を検討することで、本戯曲が執筆された当時クローゼットだった Williams が異性愛を戯曲の全面に出しながらも Blanche を同性愛者の表象にしたことについて考察したい。

2. 幸福のありか——*The Iceman*

Cometh における天邪鬼のころ

摂南大学 天野 貴史

1930年代に生じた悲劇の隆盛について、平石貴樹は「現代における人間の「卑小化」に対抗する、人間の尊厳の回復への志向」と説明する(『アメリカ文学史』)。強固な自己信頼にもとづく Ralph W. Emerson の思想は、さまざまな留保や懐疑をともないながらも、広範な支持を受けてアメリカ社会で大衆化していったが、第一次大戦後の繁栄と狂乱のジャズ・エイジに入ると、自我はもはや欲望をコントロールすることができず、その一貫性・信頼性を失っていく。こうして自我の分裂や希薄化が不可避の事態になると、その虚構性を厳しく問いつめる作家が続々とあらわれる一方で、人間の主体性に「小さなロマン主義」の視線を投げかける作家も少なからず登場し、かつての自由と夢を取り戻

すべく運命にいとむ人びとの孤独や苦悩を描いた「現代の悲劇」が流行した。こうして、自己信頼の思想にささやかな秩序回復や救済を求めるのが、この時代の悲劇の特徴である。

ところが、Eugene O'Neill の *The Iceman Cometh* (1939) が描くのは、自己信頼による幸福の追求がもたらす悲劇である。真の自己と向き合うことで本当の幸福が手に入るという信念に突き動かされて、酒場の住人は E.A. Poe の William Wilson のごとく、自己のなかの他者と生死をかけた戦いを繰り返し広げる。ある者は戦いに敗れ、ある者は、勝利によって得られたものが卑小な自己でしかないとわかると、その卑小さに耐えられずに絶望し、またある者は、自らの意思に反して他人の戦いに巻き込まれて自己喪失に陥る。戦いの果てに、酒場の主人をはじめとする大半の住人は、偽りの自己であるパイプドリームへ舞い戻る。しかしそれは、Emerson が「もし私が悪魔の子なら、悪魔に従って生きていくまでだ」と述べて、自己の内面に従って生きようとしたのと同じではない。むしろそれは、自己を偽ることの無益さに意識的である点において、Poe が「天邪鬼」と呼んだ「最も原始的な衝動」であり、罪の意識のなかにささやかな救済を求める態度である。

こうして O'Neill は、自己信頼の思想にも「現代の悲劇」の流行にも同調せず、むしろ Poe を経由して脱 Emerson の思想に傾倒した。自己信頼への執着が自己の普遍性どころか卑小化しかもたらさず、絶望を生き延びるための慰みさえコントロールできず、幻想の渦のなかでわずかに残っていた主体性さえ失われていく——*The Iceman Cometh* が提示する幸福の追求はあまりにも悲劇的であり、だからこそ O'Neill は、1939年に作品を書き終えたにもかかわらず、終戦まで上演を延期したのだろう。発表では、こうした点を、作品の19世紀的な特徴を浮かび上がらせることから論じていきたい。

司会 古木 圭子

3. 交響する「ことば」——*Suddenly Last Summer* における語りの固着/流動

九州大学(院) 幸山 智子

Tennessee Williams の戯曲 *Suddenly Last Summer* (1958) のクライマックスで語られる詩人 Sebastian

Venable の壮絶な死——異国の地で少年たちにむさぼり食われることによる死——は、同性愛的な欲望に対する「罰」として解釈されることが多い。たしかに、Sebastian による少年たちの性的搾取は階級的・人種的な問題を孕んでいるため、「罪の意識」を読み込む視座は重要である。しかし、否定的な側面があまりにも強調されすぎてきたのではないか。Williams にとって私的抒情とは「独房に監禁された囚人が、同じ境遇の囚人にむかって、自己の監房から呼びかける叫び」であり、その独房とは「銘々のからだを被っている皮膚」であるのならば、カニバリズムによる Sebastian の「死」はラディカルな形で自己と他者の境界を流動化しながら創造される「詩」であるとも言える。方向性を同じくするいくつかの先行研究を進展させつつ、詩のことばの境界侵犯性（流動性）を関連する戯曲や短編から間テクスト的に導き出すことによって、この推論は裏づけられるだろう。毎夏ひとつの詩を書き、印刷して保管していたという Sebastian は「この夏（Last Summer）」詩を書かなかったのではない。詩は彼のからだにおいて、有機的な現象として発生したのである。

このように考えたとき、ことばの固着性と流動性——とりわけ、書かれたことばとして紙の上にとどまるか否かという問題——は本作品において意識的に書き分けられていることに気がつく。本発表においては、前者が（たとえば聖書やガイドブック、St. Mary's において Catharine の言動を左右する “written permission” に代表されるように）権威と支配力をおびて規範を形成する一方、後者は（出版された後でさえ改稿を繰り返したという Williams の創作姿勢を部分的に反映しつつ）既成の秩序やイデオロギーを転覆・攪乱しうることを示したい。さらに、ことばの性質をめぐる二項対立が、Sebastian の死の真相をめぐる Violet と Catharine の「語り」による対峙やそれに付随して用いられる比喩の次元にも浸透していることに注目する。

主客の境界を流動化させるような動きはカニバリズムのみならず、作品中のいたるところで変奏されており、本作品を一種のメタフィクションとして解釈する際にも重要な手がかりとなっている。そういったことばの響きあいや丹念に読み解くことによって、作家の審美的・社会的意識をあぶりだしたい。作品が舞台とするのは1930年代であるが、執筆・発表された「冷戦期」という文脈からテキストを逆照射するために、プロダクション・コードの時代に製作された映画版（1959）にも言及しながら議論を進めるつもりである。

4. 「顔」の表象とトラウマ——

アジア系アメリカ演劇からの検証

東京家政大学 原 恵 理 子

アメリカ演劇史において、1960年代にはアジア系アメリカ演劇という言葉は存在しなかった。当時のアメリカ演劇界はアジアを出自とする俳優が少なかった。白人俳優がアジア人を演じる舞台芸術環境では主流文化が好む典型的な「オリエンタル」＝（東洋人）のイメージが創られるだけでなく、アジア系俳優が演技の機会に恵まれても、主流文化に受容され得る異国情緒的な「オリエンタル」のステレオタイプを演じることとなった。

だからアジア系演劇はアジア系アメリカ人による、アジア系アメリカ人のための、アジア系アメリカ人についての戯曲を原点に誕生した。本発表ではこの原点に立ち返り、David Henry Hwang の *Yellow Face*（2007）と Julia Cho の *BFE*（2005）を取り上げて、「顔」とトラウマをキーワードにアジア系アメリカ人をめぐる表象文化の政治学を読み解く。

本発表で「顔」に着目するのは、Dorinne Kondo の *About Face* が指摘するように、「顔は主な外見であり、アイデンティティの身体的な中心だ」からである。*Yellow Face* について、Hwang は「われわれの国や公共のイメージ、『顔』についてより多く」を語り、多文化主義の総括となる劇だと定義づける。*Yellow Face* は「社会概念としてのポスト人種を問う一方で、依然として人種差別がまだ起きている」事実に関客の関心を向けさせる。

BFE は、14歳の主人公 Panny が身体に刻まれた傷とそのトラウマ的体験から、目元の美容外科手術を決断する意味を通して、真の美の理想と「アメリカ化」の境界との関連を検証する。アジアといってもひとつの定義が困難なほど多様な「顔」をもつにもかかわらず、アジア系の劇団が演劇人の結束や政治的エンパワメントのための役割を担い、演技力の高い俳優や優れた劇作家の輩出に努めてきたのは、*BFE* が演劇表象するような「オリエンタル」という「顔」のトラウマ的経験にほかならないのではないだろうか。

人種表象は、戦争や9・11の同時多発テロのような特定の歴史的現場や民族的・宗教的対立などの文脈に関わるオリエンタリズムや帝国主義、コロニアリズムのイデオロギーの影響も否めない。また、人種偏見や先入観の背後には黄色人種に対する西洋人の不安や恐怖感にまで遡るトラウマ的記憶があるのではないか。とくに「顔」の違いは目に見えて大きく、イエロー・フェイスという「顔」の表象が心身双方の傷＝トラウ

マとして繰り返し反復される歴史的記憶にもなり得ることを *Yellow Face* と *BFE* から考察したい。

両作品はコメディの形式で＜アメリカ＞のアイデンティティ表象の葛藤に鋭く迫るシリアスな内容である。Hwang はアジア系劇作家初のトニー賞を *M. Butterfly* で受賞しており、一貫してアイデンティティの問題を検証することでアジア系演劇の発展に貢献してきたが、Julia Cho のような若手劇作家の名を挙げて、未来のアジア系演劇のあり方を指向する役割を期待する。この動向を踏まえて、アメリカの表象文化史から「オリエンタル」の他者性に深く関わる規範や理想としての美のポリティクスを明らかにしたい。

総 会 (午前10時15分~10時45分) (吉田南4号館3階, 4共30講義室)

特別講演 (午前10時45分~11時45分) (吉田南4号館3階, 4共30講義室)

司 会 若 島 正 (京都大学)

「書くことを教えること」

講 師 藤 野 可 織 氏 (作家)

ワークショップ (午前11時55分~午後1時15分)

ワークショップ I (アメリカ文学・授業方法研究会) (吉田南4号館3階, 4共31講義室)

Teaching American Literature in English

責任者・司会・発表者：Fuyuhiko SEKIDO (獨協大学)

発表者：Michael PRONKO (明治学院大学)

発表者：Akiyoshi SUZUKI (長崎大学)

In American literature, our teaching methods and awareness of language are deeply connected to our research and theorizing. How we research, conceptualize and write about American Literature necessarily informs how and why and what we teach, which is always deeply connected to language study. In this panel, the presenters will present productive, creative teaching methods for enhancing the concurrent study of literature and language.

Michael Pronko

The use of questions as a central pillar of the classroom will be discussed in this presentation as a way of motivating students to think more broadly and read more deeply. Questions are a powerful way to focus attention on literary works and get students to use English more actively. By using questions at the center of their studies, students can learn how to think on their own, and develop their own autonomy with literary texts even when their English level is low. In this presentation, examples of questions and methods for conducting question-asking and question-answering activities will be discussed.

Fuyuhiko Sekido

Ways of using short stories to make learners interested will be presented by focusing on good stories that make students absorbed, e.g. "Three Hours between Planes" by Fitzgerald and "Long Walk to Forever" by Vonnegut. Students become absorbed when stories make them think about life or love as if they were real experiences. When that happens, the hurdle of English is lowered. These stories have short films, which further stimulates learners' imaginations, and gives more opportunities to improve their language abilities. Overall, learners will have a chance not only to acquire target language but also to think about their life.

Akiyoshi Suzuki

There are two types of approach to literary texts: first, reading people and the society in texts as if they were real people and a real society; and second, reading people and the society in texts as a product of human artistic creation. Roughly speaking, they can read texts from their own nose or read with theories. However, the latter way stays inside the confines of a narrow community aiming to analyze the text, thus alienating readers who would rather follow the first

approach. World Literature as an approach is requiring the two to shake hands. Of course, many students have insufficient academic ability in English to read literature. One answer to finding a positive way of reading literature and engaging in communicative language teaching is to set up a “culminant task.” The culminant task engages students strongly with a motivating and meaningful focus on both language and literature.

シンポジア（午後1時30分～4時30分）

シンポジウム I（関西支部発題）（吉田南4号館3階，4共30講義室）

アメリカ文学における幸福の追求とその行方

司会・講師 貴志雅之（大阪大学）
 講師 白川恵子（同志社大学）
 講師 新田玲子（広島大学）
 講師 竹本憲昭（奈良女子大学）

トマス・ジェファソンがジョン・ロックの自然権「生命，自由，財産」を参照し，「財産」を「幸福の追求」に書き換えて，独立宣言書に不可侵の権利として「生命，自由，そして幸福の追求」を記したことはよく知られる。一方，「幸福の追求」の理念と共振する「アメリカン・ドリーム」の概念が，建国以来，あるいは建国以前から，現代に至るまでアメリカという国家とそこに生きる人々を突き動かす精神的原動力となってきた。本シンポジウムは，「アメリカン・ドリーム」と密接に関連し，その拠り所ともなる「幸福の追求」の理念・精神性がどのようにアメリカ文学で顕されているのかを時代を越えて検証し，過去から現在，未来に至るアメリカ文学の志向性を考えるものである。

個人の幸福の追求が別の個人や社会，国家のものと相容れず，軋轢，衝突が生まれる。マイノリティとマジョリティの関係性に顕著なように，人種，民族，ジェンダー，宗教の点で，あるいは南部と北部，東部と西部という地域によって，特定の個人・集団の幸福が他者の不幸となり，ユートピアがディストピアとなることも珍しくない。アメリカ国家の覇権が他国およびアメリカ国内の他者の幸福を損なうものとなるのも常である。幸福の追求とそのあり方は，個人と個人，個人と社会，集団と集団など，他者との関係性において相対的なものである傾向が強く，それが時代を越えてアメリカ社会・文化の多様な出来事・事件・現象のなかに顕在化してきたように思われる。

アメリカ文学は幸福（と不幸）のあり方をどう捉え，どう顕してきたのか。「幸福の追求」を巡る様々な作品が示す物語の色彩とベクトルは，アメリカを見る文学のまなざしを考える一つの視座を与えてくれるように思う。「アメリカ文学における幸福の追求とその行方」を，講師それぞれが選んだテキスト，コンテクストから検討し，論じ合うことで，アメリカを描き，表象し，予見するアメリカ文学の営為と可能性を改めて考える機会となれば幸いである。（文責 貴志雅之）

Nancy Randolph の幸福の追求——歴史小説にみる Jefferson 周辺の “the Mansion of Un/happiness”

白川恵子

「生命，自由，幸福追求の権利」を謳って植民地を独立させた Jefferson が，不可侵の生得権から公的に除外された混血奴隷情婦一族を，モンティチェロの私邸内部に隠蔽していたスキャンダルが暴露されてから，複数世代に及ぶ一族の込み入った人間関係について知られるところとなった。と同時に，この話題が，米文学の想像力生成に一役買ってきたのも事実である。

だが，ジェファソンがサリーとの関係を続けていた間に，彼の遠戚では，18世紀最大と称された別のスキャンダルが発覚し，裁判沙汰（1793）となっていたことを知るものはあまり多くないだろう。ヴァージニアの名家 Randolph 一族の義兄妹間（Richard Randolph と Nancy Randolph）の不義と嬰兒殺害容疑は，「幸福の追求」の社会的発展モデルの中核概念を担った地を舞台として発覚しただけでなく，米独立と建国史に貢献したジェファソンと並ぶ大立者が複数かかわったという意味においても，共和制期の個人による「幸福の追求」の一事例として考察するに値するのではないかと思われる。

誘惑／感傷小説のプロットに精通していた大衆にとって，この事件は，数年前に出版されたベストセラー *The Power of Sympathy*（1789）を彷彿させた。しかしナンシーのその後の人生は，自死によって終わる悲劇のヒロインとは異なる。彼女は，憲法作成・批准に貢献したフェデラリストの大物 Gouverneur Morris と結婚し，モーリザニアの女主人として，モリスの嫡子の母として，果敢に生きたのである。だからこそ，本件事件を扱った小説には，夭逝したりチャードでは

なく、ナンシーを主人公に据えた作品が目につく。大統領のスキャンダル同様、本件もまた文学的想像力を喚起して止まない。本発表では、事件概要とその歴史小説化について報告したい。その過程で、ジェファソンによって所与の権利と規定された幸福追求の概念が、ナンシーの人生／物語とどのように関連するののかについても考察したい。

幸福とは、人の手によってコントロールできるものではなく、神によって与えられし運命であるとの決定論や、ひとえにストイックな公民道徳を是とする古典的幸福観とは一線を画し、その追求が所与の権利であると明確に規定された18世紀末にあって、公的な美德と私的な幸福追求とは不可分に混ざり合う。幸福の追求という曖昧な概念は、キリスト教倫理の訓育装置として編み出されたボードゲームが本来的に内包する多義性をも想起させる。一族の幸福の理想は、糊塗と暴露によって“the mansion of un/happiness”に至る道をナンシーに与えたと言えるのではなからうか。

Truman Capote の *The Grass Harp* における記憶の中の幸福

新田 玲子

Truman Capote の長編第二作で1951年に発表された *The Grass Harp* は、アラバマ州モンロービルでの幼少期に題材を取り、“A Christmas Memory”や *The Thanksgiving Visitor* にも共通する、素朴ながら、心満ち足りた片田舎の穏やかな生活を回顧している。そのせいもあってか、*Radical Innocence* において Ihab Hassan は、*The Grass Harp* を「昼のスタイル」に分類している。

しかし一見明るい印象をもたらす Capote の作品も、その根底には常に「夜」の要素を留めており、それは *The Grass Harp* にも言えることである。実際、この作品がもたらす幸福は記憶の中にしか存在せず、幸福の温もりにも、今は失われてしまった儂さや切なさが伴う。

アメリカにはアメリカン・ドリームを追う前向きな人物が多いなか、記憶という過去に幸福を見出す Capote の姿勢は、ある意味、特異ではないだろうか。そこで本発表では、一見幸せな思い出が、記憶の中でしか存在できない原因を探してみたい。

その切り口として、まず Capote が得意とする表裏から、語り手の少年 Collin が愛する老齢の従姉妹、Dolly の住まう部屋の“an outlandish pink”に着目し、Capote が求める“home”の性質を定義する。そのう

えで、Dolly たちが待避する「木の家」に表される“home”の限界と、表題ともなっている「草の堅琴」に籠められた Capote の幸福感を分析する。

これらの考察に基づき、Capote の“home”や幸福の概念について、彼自身が育った家庭のありかたや、彼がゲイであったこと、また1950年代という時代の特徴など、個人的背景や時代的背景を絡めた提言を試みたい。

Brautigan の戯れと幸福感

竹本 憲昭

Richard Brautigan は、1960年代のカウンター・カルチャーのなかで数多くの読者を獲得し、人気作家となったが、70年代に入って彼が発表した作品は、以前にくらべて精彩を欠き、作品の売れ行きとともに、作家としての評価も落ちていった。しかし、代表作 *Trout Fishing in America* は、Brautigan の特徴が最もよく生かされている作品として、いまでも高く評価されている。

彼の特徴として従来たびたび指摘されているのは、物質文明が蔓延した現代社会における自然破壊を嘆く心情であり、彼は自然がまだ損なわれていない過去のアメリカに楽園を見出しているともいわれている。また何度も来日し、日本人女性と結婚したこともある Brautigan は、禅や俳句などの東洋文化を学び、その視点から何らかの悟りを開いて、アメリカの物質文明を相対化していると思われることさえある。

それでは Brautigan にとっての幸福とは、森の中で暮らした Thoreau のように、物質文明から離れた自然の中での生活に見出されるのだろうか。たしかに Brautigan にはそのような側面もあるのだが、決してそれだけではない。彼にはそれと全く逆の、卑俗なものにも興味をもつ、好奇心旺盛な子どものような側面が認められる。*Trout Fishing in America* は長編小説とされてはいるが、断片的な部分から構成され、短編連作や短編集に近い。この作品を構成する多数の断片的なエピソードを束ねているのが、タイトルにもなっている“trout fishing in America”という言葉であり、この言葉は文字通りの「釣り」という行為のみならず、人物、場所、状況など、様々な意味を持たされている。こうした断片性や多義性は、多分にポストモダン的であるといえるが、同時に、移り気な飽きっぽい子どもの遊び心を連想させる。そして *Trout Fishing in America* には自然破壊を嘆く悲観的な色合いとともに、子どもっぽい遊び心が満たされるときに幸福感が、

にじみ出ているように思われる。この作品に彼のそのような幸福感がいかに表現されているか、検討してみたい。

タブーを犯した成功者——*The Goat, or Who Is Sylvia?*における幸福の追求と破壊

貴志雅之

Edward Albee は劇作家の道を歩み始めた当初より、アメリカ人が抱くアメリカン・ドリームと「幸福の追求」願望の歪みを夫婦、家族の姿を通して描いてきた。養子にした子を物のように扱い、意に添わなければ廃棄する中年夫婦の姿に、大量消費文化のなかで本物の価値を見る目を失い、表面的な美しさと豊かさに幸福を追い求める現代人の精神的不毛性を映し出した *The American Dream* (1961)。一方、*Who's Afraid of Virginia Woolf?* (1962) では、存在しない息子の幻想を唯一のかすがいに生きてきた夫婦が、息子の死を自ら宣告して幻想を碎きながら、現実世界を直視する恐怖に怯える。夫婦生活の幸せを息子の幻想なくして持ち得ない夫婦の問題が示された。それから40年、2002年度トニー賞受賞作 *The Goat, or Who Is Sylvia?* は、獣姦というショッキングな問題を軸に一人の男の幸福の追求がもたらす「悲劇」を描いた問題作である。本発表では、アメリカン・ドリーム、禁忌行為、規範、暴力をキーワードに、*The Goat* に見られる「幸福の追求と破壊」について考える。

幸せな家庭を持つ著名な建築家が山羊に恋して獣姦を犯す。それにより夫婦・家庭生活の破壊を招き、自身の名声と地位を危うくし、最後には妻に山羊を殺される。これが *The Goat* の顛末である。発表では、獣姦という禁忌行為を社会的規範の侵犯、その行為者を異常者・変質者と見る社会通念を取り上げ、社会的経済的成功というアメリカン・ドリームの達成に「幸福の追求」のあり方を見いだす精神性・イデオロギーを考察していく。作品中、アメリカン・ドリームを実現したロール・モデルと言える主人公が自らの幸福追求の為に犯した禁忌行為によって、「幸福の追求」の社会的理想像を破壊する。一方、彼の動きを阻止すべく外在的力が作用する。この両者の関係性を中心にした議論で、ゲイの息子と主人公との疑似近親相姦の同性愛場面、夫の獣姦告白を受けた妻による山羊の惨殺が検討対象となる。

最終的に、本作の副題「悲劇の定義に向けた覚書」

(“Notes toward a definition of tragedy”) に示された現代の「悲劇」の意味とオールビーが本作の主題の一つに挙げた「寛容性の限界」を検討する。これにより、本作に見られる「幸福の追求と破壊」を21世紀アメリカの個人と社会が孕む一つの問題として一定の見解が出せればと思う。

シンポジウムⅡ（九州支部発題）（吉田南4号館2階，4共21講義室）

逸脱する結婚——アメリカ文学と不倫のエロス

司会・講師 高野泰志（九州大学）

講師 舌津智之（立教大学）

講師 高橋美智子（福岡大学）

コメンテーター 大井浩二（関西学院大学・名）

不倫は常に人々の好奇心と想像力をかき立ててきた。ギリシャ神話や聖書を始め、これまでおびただしい数の文学作品が不倫のモチーフを活用してきた。それは一方では社会規範からの逸脱として断罪されながら、他方ではエロティックな好奇心をそそってきたからである。いわば禁忌であるが故に欲望の対象となり、センセーショナルな題材として活用されてきたと言える。

アメリカ社会においてはそのピューリタニズム的出自のために、「不倫」はとりわけ強い断罪の対象となってきた。そしてその強い抑圧こそが逆に物語を駆動させる強い欲望を生み出してきたとも言えるだろう。19世紀アメリカの不倫文学の代表である Nathaniel Hawthorne の *The Scarlet Letter* (1850) はピューリタン植民地時代を舞台にし、なおかつ主人公のひとりを牧師とすることで、不倫にかかる抑圧がもっとも強い状況を設定しているが、この抑圧の強度は作家本人の抑圧への意志だけでなく、その秘めた欲望の強度をも表しているはずである。その2年後に書かれた Herman Melville の *Pierre: Or the Ambiguities* (1852) は、父の不倫が物語を動かすきっかけとなり、主人公を、姉を交えた二重の意味での逸脱した結婚へと導く。

その一方で19世紀後半から20世紀にかけて、この抑えがたい欲望は結婚制度への異議申し立てとしても利用されることになる。Theodore Dreiser の *Sister Carrie* は語り手が何度もその不道徳を非難しながらも、妻子ある Hurstwood と不倫の関係を結ぶ Carrie は最終的に罰されることなく社会的成功を収める。いわば結婚制度をめぐるヴィクトリア朝的ダブルスタンダードを逆転させていると言えるだろう。また Kate Chopin の *The Awakening* では、女性の性欲が否定されていた時代に、主人公 Edna は性的欲望の主体となることに目覚め、それまで男性に占有されていた、主体的に不倫を欲望し、男を誘う役割を演じるのである。

いずれにせよ世紀転換期までは、それら不倫に踏み切る登場人物たちは、家父長制の根幹を揺るがす大罪を犯した者として厳しく断罪されるか、さもなければ

作品そのものが弾圧の対象となってきた。このように罪深い行為とされているにもかかわらず、あるいはそれ故になおさら、不倫は作家たちを魅惑し続けてきたのである。本シンポジウムは性の解放を迎え、不倫への欲望が顕在化はじめて20世紀初頭に活躍した三人の作家を各講師が取り上げ、罪と魅惑の対象としての「不倫」からアメリカ文学に切り込むことによって、結婚制度、セクシャリティ、ピューリタニズムといったテーマを新たな角度から問題化することを試みる。また2013年に『エロティック・アメリカ』を上梓した大井浩二をコメンテーターに迎え、積極的なディスカッションを行う予定である。（文責 高野泰志）

Jake Barnes の欲望の視線——不倫小説として読む *The Sun Also Rises*

高野泰志

The Sun Also Rises (1926) は表面的には不倫の物語ではないものの、Ernest Hemingway の不倫の欲望から生まれた作品とも言える。周知のようにこの作品は、発表当時は実話小説として読まれ、それぞれの登場人物には明確なモデルとなる人物がいた。Hemingway 自身をモデルにした Jake Barnes は、Duff Twysden に基づく Brett Ashley を欲望しながらも、性的不能であるためにその欲望をかなえられないでいる。テキスト中から Hemingway の妻 Hadley と長男の姿は消され、Jake は独身という設定になっているが、そういう意味で Jake の不能は Hemingway 自身が感じた不倫の禁忌の象徴でもある。

実生活における妻と息子の「存在」が、テキスト中では主人公 Jake の性器の「不在」へと転嫁されたとき、*The Sun Also Rises* という物語は動き出したと言えるだろう。Brett / Duff への欲望を切り落とすかのように、作者 Hemingway は Jake の性器を切り落とすも

の、逆説的に Brett に向けた Jake の欲望は失われるどころか、ますます高められることになる。なぜなら妻子の「存在」は欲望の視線そのものを禁ずるが、性器の「不在」は欲望そのものを生かしながら、それを満たす手段だけを消し去ることになるからである。

いわば *The Sun Also Rises* という物語を中枢で駆動させているのは、作者 Hemingway の隠蔽された不倫への欲望であり、性器の「不在」によって発露を許された主人公 Jake の不可能な欲望なのである。本発表ではこの Jake の欲望を追うことで、Hemingway の不倫の欲望がどのように物語に影響しているかを論じる。

The Sun Also Rises は実話小説として書き始められながら、モデルとなった人々が忘れ去られた今もなお読み継がれている。それは不倫への欲望と、欲望することへの罪の意識とのせめぎ合いが、登場人物の間に欲望を駆動させるダイナミズムとなっているからである。Hemingway が自ら抑圧しようとした欲望がいかなる形で作品の核として昇華されたのかを明らかにしたい。

利用する女、逃れる男——*Tender Is the Night* に描かれる不倫と結婚

高橋 美知子

本発表では F. Scott Fitzgerald の *Tender Is the Night* (1934) の主人公 Dick Diver と妻 Nicole それぞれの（潜在的）不倫と、作中における結婚制度の揺らぎについて考察する。

Nicole と Tommy Barban の関係に目を向けてみると、それはエキゾティシズムの流行を具象化したような関係である。Ruth Vasey が指摘するように、当時のアメリカでは「エキゾティックとエロティックが深く結びついて」おり、肌の浅黒い俳優たちはメインストリームのアメリカ人とは遠く離れた存在であるがゆえに、「際限ないエロティックな可能性に対してオープンであると考えられ」、その代表格 Rudolph Valentino は「何百万という女性の欲望の典型的な対象」であった。だが Nicole と Tommy の関係は不倫に終わらず、彼女は Dick と離婚して Tommy と再婚することを選ぶ。一見 Nicole は結婚制度の枠組みの中に安住することを選んだようにも見える。しかし、Tommy との「情事」を前に彼女が見ているのが「従う必要も愛する必要もないたくさんの男たちがいる新しい景色」であることを考慮すれば、いわば Nicole は結婚制度を利用しつつ、必要に応じて夫を取り換えな

がら生きていこうとしていると言えそうである。

次に注目したいのは、Chris Messenger が “the girl” と呼び、「もしかすると、(Dick の) 意志で好きなように目撃することが出来るのかもしれない」と訝るほどに数多い、Dick の人生を横切っていく名もなき女性たちである。Dick が「少女」に執着するのはなぜか、そして Nicole や Rosemary Hoyt を彼が希求する「少女」の一例であると捉えることは可能かを考察していく。その過程において、Nicole と Rosemary の共通項としては若さと白さがあること、つまり Nicole は黒さに惹かれ Dick は白さに惹かれるという二人の不倫のコントラストについても考えてみたい。件の「少女」の影は Nicole と離婚し、アメリカに戻ったのちも登場している。Nicole に見事に利用された Dick は、作品の最後では「誰か家の世話をしてくれる人と一緒に暮らしている」らしい。これを Dick が結婚という制度のしがらみと重圧から解放される道を選んだのだと捉えれば、伝統的に Dick の凋落の物語として読まれる *Tender Is the Night* に、違う角度から幾ばくかの光を照射できよう。

Rosemary もまた、結婚制度に縛られない生き方をしていることを考えれば、*Tender Is the Night* で描かれるのは単なる婚外恋愛ではなく、従前の結婚制度から様々な形で飛び出していく登場人物たちの姿ということが出来る。Nicole と Dick、二人の不倫を通して、結婚制度からの逸脱の物語として *Tender Is the Night* を読んでみたい。

不倫と同性愛——Willa Cather にみる婚外のエロス

舌津 智之

大井浩二は、『エロティック・アメリカ』において、ヴィクトリアニズムの裏側に脈動するアメリカのエロス——多くの場合、規範的な異性愛ではなく逸脱的要素を孕む性愛——をあぶり出すうえで、手紙や日記といった個人的なエクリチュールに注目したが、同じ文脈において精査されるべきは、2013年に初めて活字化された Willa Cather の書簡集である。たとえば、(ボストン・マリッジを実践した) Sarah Orne Jewett と Annie Fields の二人が、自分にとっていかに大きな存在であるか、Cather は Fields に宛てた手紙の中で幾度か述べている。さらに、同性の親友であった Isabelle McClung と久々に会うことを Fields に報告する手紙 (1912年) のなかで、Cather は、ネブラスカの大草原を嗅覚的かつ官能的に捉え、“you can smell

the ripe wheat as if it were bread baking”と書いているが、この表現は、*O Pioneers!* (1913年) に描写される “the smell of the ripe wheat, like the smell of bread baking” というフレーズに昇華されている。私信と小説のこうした共鳴は、不倫の主題をサブプロットに据えた Cather の出世作が、作者の個人的な同性愛の感情とも絡みあう可能性を示唆しうる。

Cather が Fields の存在を念頭に書いたと目されるもう一つの不倫小説に、*A Lost Lady* (1923年) がある。Susan Rosowski と Kari Ronning は、この中編小説のヒロインである Forrester 夫人のうちに、同じく年長の男性と結婚／死別し、その伝説的ホスピタリティをもって来客者たちをもてなした Fields の影を読み込んでいる。無論、Forrester 夫人に憧れる視点人物 Niel のまなざしは、男性のペルソナを通して女性を見つめる Cather の目線と重なりあっている。つまり、不倫という主題を前景化する Cather の小説は、そこへ同時に同性間のエロスを織り込むことにより、制度としての異性愛に対する抵抗のしぐさを補強する。伝記的にみると、Cather は、*O Pioneers!* を出版する前年の1912年から、Edith Lewis との安定的な同居生活を始めているが、その後も、以前から親しかった McClung との親密な関係は続き、二人で長い旅行に出かけることもあった。本発表では、Cather の (人生と) 作品が、一対一の恋愛関係を強いる対幻想に抗い、イデオロギーとしての結婚・家族制度を相対化しつつ、複数形の友愛関係を許容する官能的親密圏の構築を目指したものであることを見極めたい。